西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集

堂ヶ嶋遺跡　寺崎遺跡
法元遺跡　童子丸遺跡

妻北地区公共下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ

2005

宮崎県西都市教育委員会

序

古く、日向国の中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、各種の開発事業によって影響を受ける埋蔵文化財・遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成16年度公共下水道事業に伴い、西都市大字三宅、童子丸、右松所在の堂ヶ嶋遺跡、童子丸遺跡、寺崎遺跡、法元遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査概要報告書です。

今回の調査では竪穴住居跡やそれに伴うカマドの痕跡、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴、それに伴う古代の土器破片、瓦、漁労具が出土しました。

また、墳丘の消失した円墳の周溝も確認され、そこからは土師器と須恵器の破片が出土しました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の古代を理解するためには極めて重要なものであります。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた、西都市都市計画課、宮崎県教育庁文化課、また発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成１７年３月１８日

西都市教育委員会
教育長　黒　木　康　郎

例　言

1．本書は、西都市教育委員会が西都市都市計画課下水道係の委託を請け、平成16年度実施した妻北地区に所在する遺跡の調査概要報告書である。

2．調査は、平成16年6月15日から平成17年2月2日まで行った。

3．発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。

4．調査は、3区、4区、5区、D区を蓑方政幾、1、2、5区、B、C区を津曲大祐が担当した。

5．調査及び図面作成は、蓑方・津曲が行い発掘調査者全員で補助した。

6．遺物の実測・拓影、遺構・遺物の浄書は蓑方・津曲が行った。

7．本書の執筆は第Ⅰ、Ⅱ章を津曲が、第Ⅲ章を蓑方・津曲が行い、編集は津曲が行った。

8．本書に使用した方位は、座標北（G.N.）と磁北(M.N.)である。

9．本書に使用した標高は、海抜絶対高である。

10. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。

11. 本書で使用した空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託した。

12. 調査地点は調査年度‐路線名‐調査地点番号で記号化した。また、起債事業の路線名は補助事業と区別するためにアルファベットで示した。例：16‐1‐1は16年度に調査した補助事業のⅠ工区の1地点。
16‐B‐1は16年度に調査した起債事業のNO2路線の1地点。

目　次

第Ⅰ章序説
　　第１節、　調査に至る経緯…… 1
　　第２節、　調査の体制…… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境…… 2
第Ⅲ章　各遺跡の調査…… 5
　　第１節、　遺跡の現況
　　第２節、　遺構と遺物
第Ⅳ章　小結 …… 23
　報告書抄録 …… 30

挿図目次

Fig 1．周辺遺跡分布図（1/25000）
Fig 2．調査区位置図　(1/5000)
Fig 3．1区基本層序(1/20)
Fig 4．2区遺構、遺物実測図 1/40、1/3)
Fig 5．3-1～6地点位置図（1/2000)
Fig 6．3-1～6地点基本層序（1/40)
Fig 7．3-1～6地点出土遺物実測図(1/4)
Fig 8．3-12～14地点位置図（s=1/2000)
Fig 9．3-12地点消失円墳周溝内出土遺物実測図（s= 1/4)
Fig10．3-12地点消失円墳葺石及び土層図（S=1/40)
Fig11．3-14地点消失円墳葺石及び土層図（S=1/40)
Fig12．3-14地点　消失円墳周溝内出土遺物実測図（1/4)
Fig13．4-20、25．27地点位置図（1/2000)
Fig14．4-20地点遺構分布図及び1号住居跡カマド実測図
　　出土遺物実測図（S=1/200、1/40、1/4)
Fig15．4-25、26地点遺構部分布図及び住居跡内出土遺物
　　実測図（s=1/200、1/4)
Fig16．4-27地点遺構分布図及び住居跡内出土遺物実測図
　　(s=1/200、1/4)
Fig17．5区基本層序（S=1/20)
Fig18．B-4、7地点遺構実測図、位置図(1/40、1/50、1/2000)
Fig19．B-4地点出土遺物実測図　(S=1/4)
Fig20．C区遺構実測図(s＝1/40、1/100、1/2000)
Fig21．C区遺物実測図(S＝1/4)
Fig22．D-14～17地点位置図(S＝1/2000)
Fig23．D-14～17遺構分布図及び住居内出土遺物実測図
　　(S＝1/200、1/4)

図版目次

ＰＬ１　①調査区全景（真上から）
　　⑥Ｂ－４地点近世面⑦Ｂ－４地点竪穴住居跡掘削状況
　　⑧Ｂ－４地点土層⑨Ｃ－１地点柱穴堀方検出状況
　　⑩Ｃ－１地点柱穴堀方半裁状況
ＰＬ２　①Ｃ－５地点遺構検出状況（南から）②Ｃ－５地点掘削状況（北から）③Ｃ－５地点竪穴住居跡掘削後（南から）
　　④Ｃ－５地点土層⑤Ｃ－15地点竪穴住居跡掘削後
　　⑥Ｃ－15地点カマド跡掘削後⑦Ｃ－17地点遺構掘削状況
　　⑧Ｃ－18地点遺構掘削状況⑨Ｃ－18地点遺物出土状況
ＰＬ３　①3-2地点掘削後②3-3地点土層③3-8～11地点掘削前状況④３－８地点遺構掘削前状況⑤３－８地点遺構検出状況⑥３－12地点古墳葺石検出状況１⑦３－12地点古墳葺石検出状況２⑧３－14地点古墳葺石検出状況１⑨３－14地点古墳葺石検出状況２⑩３－14地点土層
ＰＬ４　①４－１地点掘削後②４－20地点遺構検出状況③４－20地点カマド検出状況④４－27地点遺構検出状況⑤４－30地点遺構検出状況⑥Ｄ－２地点掘削前状況⑦Ｄ－２地点掘削後状況⑧Ｄ－５地点掘削後状況⑨Ｄ－10地点遺構検出状況⑩Ｄ－15地点遺構検出状況
ＰＬ５　２区、Ｂ区、Ｃ区、３区、４区、Ｄ区出土遺物

第Ⅰ章　序説

第１節　調査に至る経緯

当地区に所在する遺跡の発掘調査は、公共下水道敷設事業に伴い実施したものであり、平成16年度からの事業である。内容は現在、市道、県道として利用されている道路に下水道管を敷設する工事で、工事区域に隣接して西都原古墳群や日向国府跡が所在し、周辺地での埋蔵文化財調査例が多くあるため、事業主である西都市都市計画課と協議した結果、遺構・遺物が出土した場合の現状保存が困難であると判断し、記録保存を目的とした本調査を実施した。

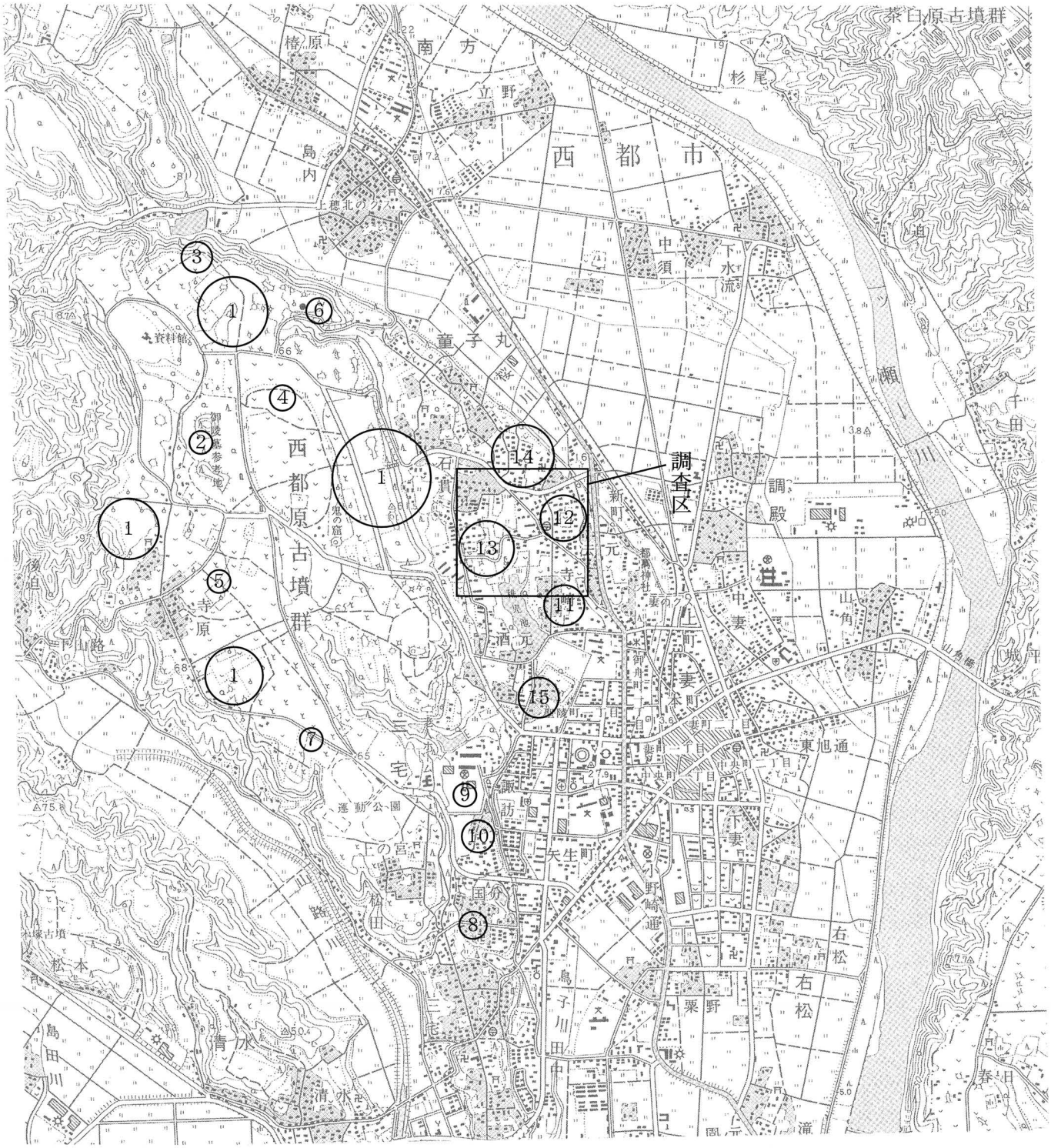
第２節　調査の体制

事業主体	西都市役所　都市計画課　下水道係	
調査主体	教　育　長	黒木康郎
	文化課長	森　康雄
	同　補佐	村岡満徳
	同　主査	重永浩樹
	同　主事	筌瀬明宏
調査担当	同　係長	蓑方政幾
	主事	津曲大祐

調査指導　　日　高　正　晴（西都原古墳研究所長）

発掘作業　　井上六雄、緒方タケ子、黒木トシ子、児玉征子、篠原時江、関治代、長谷川クミエ、浜田スミ、疋田はる子

整理作業　　菊池妙子、中原昭美、長谷川明美



1．西都原古墳群　2．陵墓参考地(男狭穂塚・女狭穂塚)　3．丸山遺跡　4．西都原遺跡　5．寺原遺跡　6．新立遺跡
7．原口第２遺跡　8．日向国分寺跡　9．日向国分尼寺跡　10．国分遺跡　11．寺崎遺跡　12．法元遺跡　13．堂ヶ嶋遺跡
14．童子丸遺跡　15．酒元遺跡

S＝1/25,000

Fig 1　平成 16 年度調査区の位置と周辺遺跡

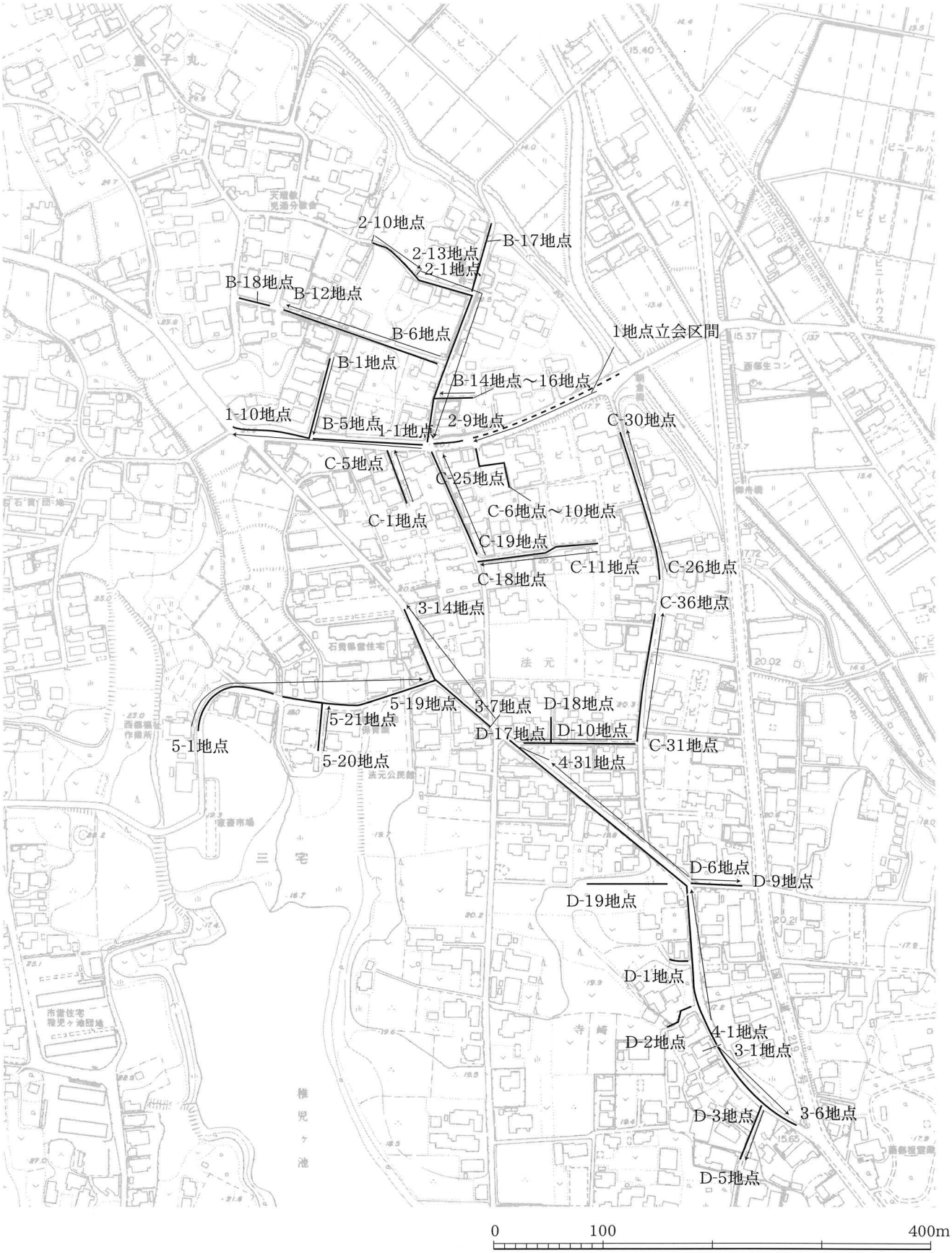


Fig 2　調査区位置図

1：5,000

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　立地

本調査区は、宮崎県西都市の中心に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約 1km である。

九州山地から東に伸びる丘陵が一ツ瀬川により浸食され流域に沿い沖積平野を形成し、その平野を挟んで洪積世台地が南南東に伸びる。一ツ瀬川からみて西側が国指定特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。本調査区は西都原台地の東側から南東に広がる中間台地で、標高は約 20m の位置にあり、西都原台地との比高差は約 30m である。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が河川の浸食により形成された平野と八つ手状に伸びる洪積世台地から成り、その台地上や台地縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

第２節　歴史的環境

西都原台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

主要な遺跡を概観すると、まず台地上の東西 4.0km、南北 2.0km の範囲に広がる国指定特別史跡・西都原古墳群があげられる。古墳時代前期から終末期までの古墳群であり、その構成の通時性と同時期における多様性、良好な遺存状況は稀有の事例であり、宮崎平野部の古墳時代を理解する上で最も多くの情報を持つものである。

この西都原台地は古墳群により有名であるが、その台地の北西端には縄文時代早期の集石遺構が確認され、台地中央部には弥生時代後期前半の住居跡が確認されており、古墳時代以前から当地域の生活遺構が所在する。また台地東北端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落である新立遺跡があり、台地南端部の寺原地区には古墳時代の大集落が所在することが予想される。

また、台地の東側から南東側にかけて、約 30m 下った標高には中間台地が広がっており、遺跡が集中する。その中間台地の北側に位置する寺崎地区には日向国府跡、南東側に位置する国分地区には日向国分尼寺跡（推定）、南に日向国分寺跡が所在する。その他、西都原古墳群の支群も点在し、堂ヶ嶋地区、国分地区においては平成 12 ～ 13 年度に地下式横穴墓群も調査された。同地域内である童子丸地区、刎田地区を中心に 7 世紀以降の住居跡も多く確認されることから、当地域は複数時期に渡り墓域や集落域として利用されて現在に到る、広域の複合遺跡として評価することができよう。

これらの地区を中心とした周辺遺跡の調査と成果は堂ヶ嶋第 2 遺跡（註 1）の調査報告書に詳細にまとめられているため参照されたい。

前述したように本調査区もこの中間台地であり、今年度の調査の中心は日向国府跡の北側から西側にあたる地区で堂ヶ嶋遺跡、寺崎遺跡、法元遺跡、童子丸遺跡が該当する。国衙関連施設の一部や同時期の集落などの手がかりが得られる可能性とともに古墳時代に遡る遺構が多く確認される可能性がある。

今回の調査は下水道敷設工事に伴うもので、調査区は狭く長いものになり、個々の地点で検出された遺構、遺物の性格を決定づけるに十分でないが、広範囲にわたるため、各地区における遺構、遺物出土状況から複合遺跡内をさらに色分けする根拠を得ることができるものと考える。

第Ⅲ章　各遺跡の調査

第１節　平成 16 年度調査区の設定と概要

１、調査区の設定

平成 16 年度の調査区は下水道敷設工事の工区に沿って設定した。１工区の一部は現段階で地形が大きく削平されており、遺構が残存している可能性がないため工事の際の立会いとした以外は本調査をおこなった。

各調査区の位置関係と調査区番号は Fig2 に示した。総調査面積は約 1783 ㎡である。

２、調査の方法

調査は協議の結果、作業の安全性確保のため幅約 0.8m ～ 1m、現地表面から約 1m までの深さを対象にする。調査対象の下水道敷設路線が現在道路であるため、周辺地住民の生活に及ぼす影響を最小限に抑える必要があることから、調査は基本的に１日で完結する形態をとった。そのため、１日に進む延長は１日で調査を終了し、埋め戻しが完了して現況に復旧できる範囲となり、約 10m ごとを基本単位として調査に臨むこととなった。しかし、遺構や遺物が集中して複数日調査が必要な場合は鉄板で仮復旧して調査を継続する。

第２節　遺構と遺物

１、１区の調査（Fig2）

A、遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡である。１区の調査前の現況は、アスファルト舗装された市道 291 号線で、調査区内では最も広い道路である。総延長 305 m、面積 292 ㎡を測る。掘削前に目に見える遺構は残っていない。遺跡名は童子丸遺跡となる。起点から約 160m は道路敷設の際に大きく削平を受けたことが明らかであったため、本調査を行わず、工事の際に立会したが、それ以降は地形の残存状況がよいので、重機で慎重に舗装路盤を剥ぎ、一部深く掘削し基本層序を把握して、遺物等の有無を確認しながら調査を進めた。本調査面積は 132 ㎡となる。

B、遺構と遺物（Fig3）

調査区からは溝や、不整形な土坑を検出した。基本層序は Fig3 の通りである。調査区内では最も広い路線であることから、路盤も厚い。しかし、過去に畑地として利用された履歴があり、耕作土として盛土がなされていたことから、一部では旧地表は比較的よく残っており、現路面から約１m の深さでアカホヤ火山灰層が検出できる箇所もある（16-1-8 ～ 10 地点）。そのため、遺物包含層や、遺構も残り、1-7 ～ 9 地点においては竪穴住居跡の可能性がある遺構を検出し、埋土中からは土師器破片や須恵器破片が出土した。

他に溝状遺構を検出した。遺物は古墳時代後期～近世にかけて出土した。

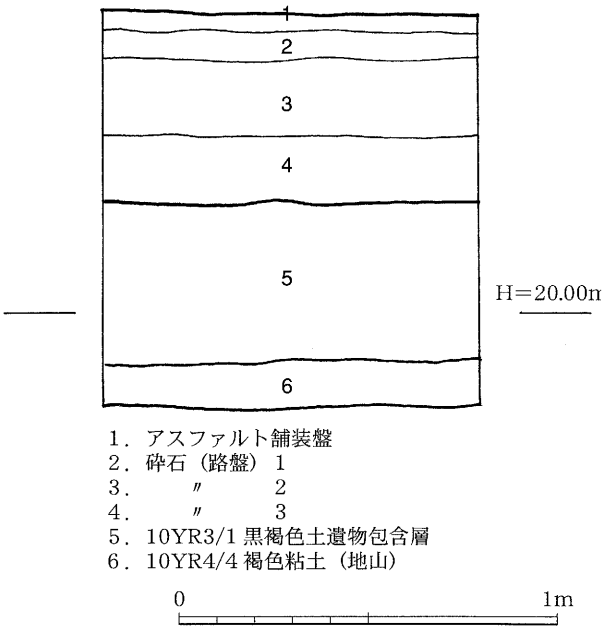


Fig 3　１地点基本層序　　1：20

2、2区の調査（Fig2）

A、遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡である。現況はアスファルト舗装した市道288、286号線である。1区の市道291号線から北側に入る市道で、中間台地の縁に当たる。地形は南側より次第に傾斜し低くなる。周囲には西都原古墳群の支群が点在し、また中世期の遺物が表採できる散布地が所在するが、調査区である市道は周辺地形よりも標高が1m～2m低い地点もあるため、道路敷設時に地形が削平を受けたことが予想できた。

調査は長徳寺横の細い市道から始めた。総延長は約210mで、総調査面積は約168㎡である。

B、遺構と遺物　(Fig4)

2-1～2地点：造成時に旧地形が削平されて、地層自体が残っていなかった。路盤を剥ぐとすぐに礫層にあたり、遺構、遺物はなかった。

2-3～9地点：道路敷設時に削平を受けており、過去、周辺に竪穴住居跡が確認された畑があるが、そこから約2m標高が低い（註2）。アカホヤ火山灰層は残存しておらず、褐色土、黄褐色土の下は礫層である。出土遺物等も少なく、2-9、10地点において検出された溝状遺構に伴う程度で、他は包含層内からの一括遺物であった。

2-10～13地点：調査区は水道管が敷設される際に、掘削され大きく撹乱を受けていたが、11、12地点のみ水道管路が逸れて地層が残っており、11地点で溝状遺構2条とピット、12地点では竪穴住居跡と見られる堀方を検出した。それに伴い須恵器、土師器の破片が数点出土した。溝状遺構は幅210cm、検出面より約38cmの深さで、片側は二段の堀方になる。竪穴住居跡と考えられる堀方はアカホヤ火山灰層上面で検出し、約19cmの深さである。対応する立ち上がりは約5m先で検出したことから一辺約5mの堀方であると推定できる。

出土遺物：1は須恵器の坏蓋つまみ部分の破片。つまみの径2.1cmを測る。焼成は良好。2は須恵器で平瓶口縁部の破片と推定した。口縁部内側に緩い段をつける。胎土は緻密で焼成は堅緻。3

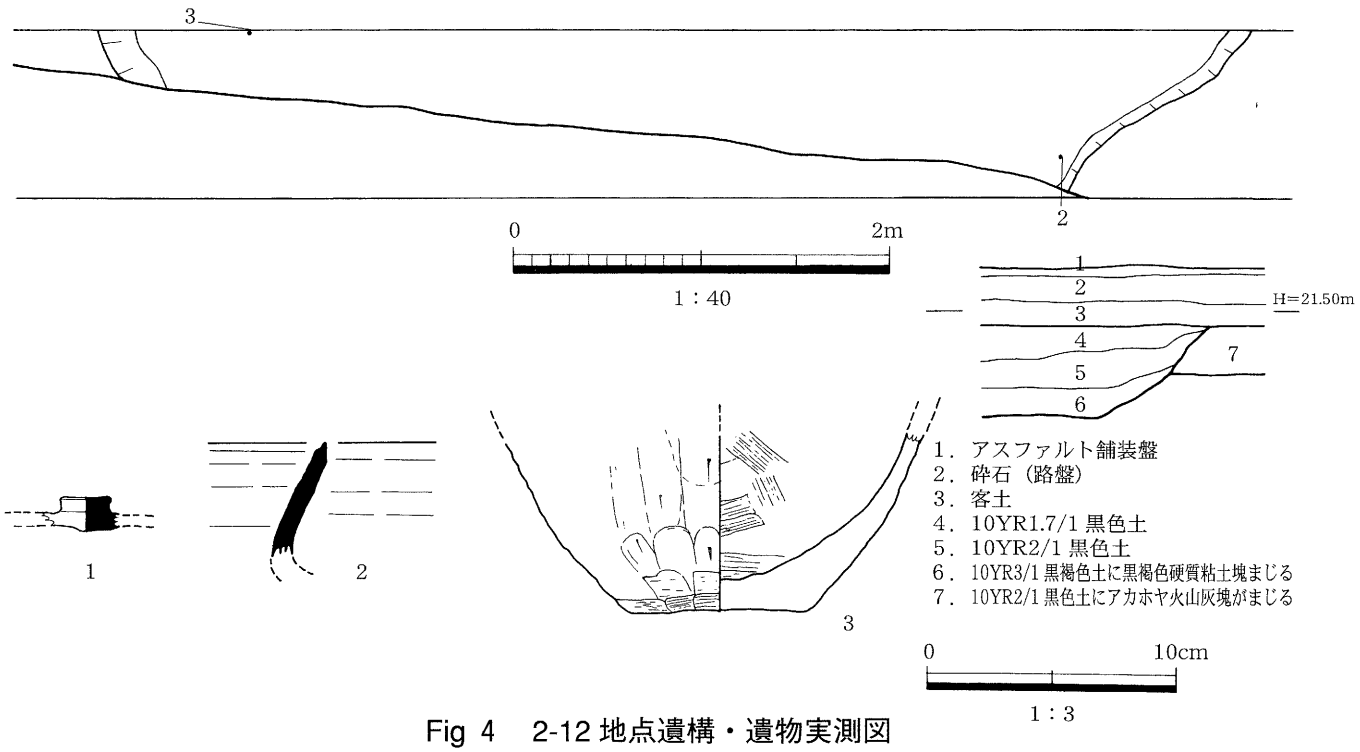


Fig 4　2-12地点遺構・遺物実測図

は土師器長胴甕の底部で底径 7.2cm である。外面底部は粗い不定ナデで、側面に向か縦にナデ上げられる。二次加熱による黒変がある。内面は板ナデが不定方向に施され、上方に向かい斜めにナデ上げる。外面は 10YR8/4 浅黄橙色を呈し、内面は 5Y5/1 灰色を呈す。胎土は粗く褐灰色、褐色粒長石等が多く混じる。

3．3 区の調査（Fig2）

A．遺跡の現況

本調査区は、国道 219 号線から法元地区に向って北西に延びた市道 301 号線で、中央部の 4 工区を挟んだ南側 60.0 m（16-3-1 ～ 6 地点）と北側の 80.0 m（16-3-7～14地点）の総延長 140.0 mで、調査面積は 140 ㎡である。この市道を隔てて東側が法元遺跡、西側が寺崎遺跡となっている。

本調査区の南側地点は、日向国府跡（日向国衙跡）が所在する台地の東側低地にあたるため、これらに関連した遺構や遺物等が検出されるのではと注目された。

本調査区の北側地点には、西都原古墳群の支群である 2 基の円墳（西都原古墳群第 259 号・260 号）が隣接して所在している。

B．遺構と遺物（Fig5、6、7、8、9、10、11、12）

3-1 ～ 6 地点：1 ～ 6 地点は 3 区の南側調査区で、標高 17.7 m前後、東側には法元遺跡、西側には寺崎遺跡が所在する台地に挟まれた低地である。特に、西側台地上の寺崎遺跡には日向国府跡（日向国衙跡）が所在する最重要地域であり、県教育委員会によって正殿及び脇殿等が確認さている。

本調査区については、Fig6 でもわかるように、かなりの土が堆積した状態になっており、4 層に分層できる。その深さは 1.25 m前後を測り、それぞれに遺物を包含している。底には砂や丸礫等が確認されることから、旧河道であったと推定される。

出土遺物：遺物は、主体を占めているのは土師器で、その他、須恵器・磁器・陶器・瓦等が出土している。これら遺物の時期は、9 世紀から 12 世紀頃までのものが最も多く、それ前後のものも含まれている。今回はその中の代表的及び特徴的なものを抽出して掲載した。

1 は土師器椀の底部で、断面三角形状の高台が付く。底径 3.5 ㎝、高台裾径 6.6 ㎝を測る。外側底面には花弁状圧痕が施され、両面ヨコナデ調整であるが摩滅が著しい。2 は土師器坏の底部で、底部と体部の境目が突出している。両面ヨコナデ調整である。3 は小型須恵器壺の胴部で、外面には 2 本の凹線を施している。両面丁寧な回転ナデ調整である。4 は須恵器椀の底部で、短く先端が平坦な高台が外向きに付く。底部復元径 3.9 ㎝、高台復元径 5.7 ㎝を測る。両面回転ナデ調整である。5 は染付の小皿で、花の文様が施されている。6 は平瓦で、凸面には横位の細かい縄目叩きが、凹面には叩き板によるナデ調整が施され、わずかに布目痕を残す。7 も平瓦で、凸面には6 よりもかなり荒い横位の縄目叩き、凹面に叩き板によるナデ調整が施されている。

16-3-12 ～ 14 地点：3 区の北側調査区で、消失円墳の裾部に残る葺石と周溝を確認した。葺石は 12 地点と 14 地点で確認し、12 地点の葺石は長さ 20 ～ 30 ｃｍ・厚さ 10 ｃｍの大きい石を根石にして、その上に長さ 10 ～ 20 ｃｍ・厚さ 5 ～ 8 ｃｍの平らな石を水平に突き刺すように丁寧に積み上げている。14 地点の葺石は、全体的に 12 地点と比較して小さく長さ 8 ～ 10 ｃｍ・厚さ 3 ～ 8 ｃｍ、根石も確認できなかった。積み上げ方も少し雑である。いずれも、高さ 0.4 m程しか確認できない。この葺石を基に復元すると径 26.2 mの円墳が所在していたことになる。

また、周溝は、残念なことに 14 地点だけで、12 地点では撹乱を受けていることから確認する

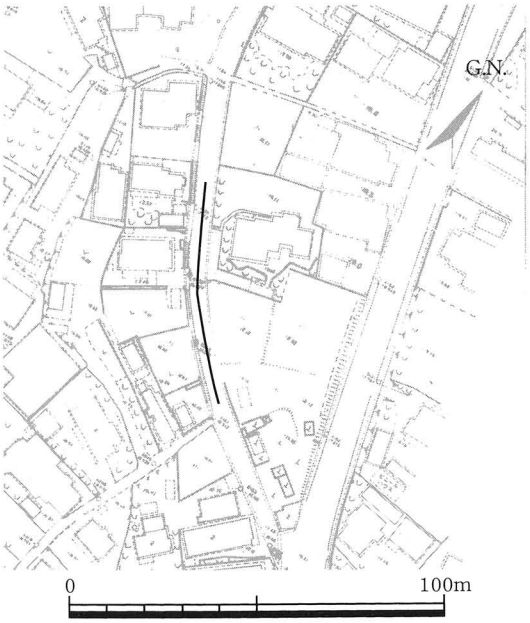


Fig 5　3-1 ～ 6 地点位置図　(S = 1/2,000)

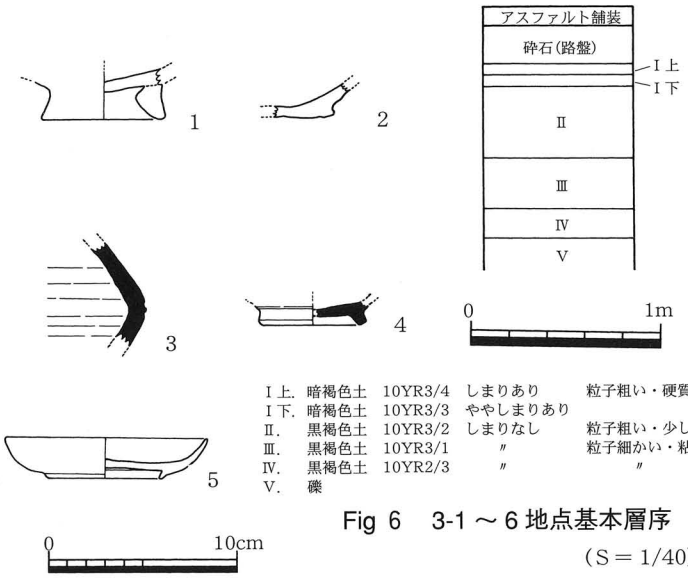


Fig 6　3-1 ～ 6 地点基本層序
(S = 1/40)

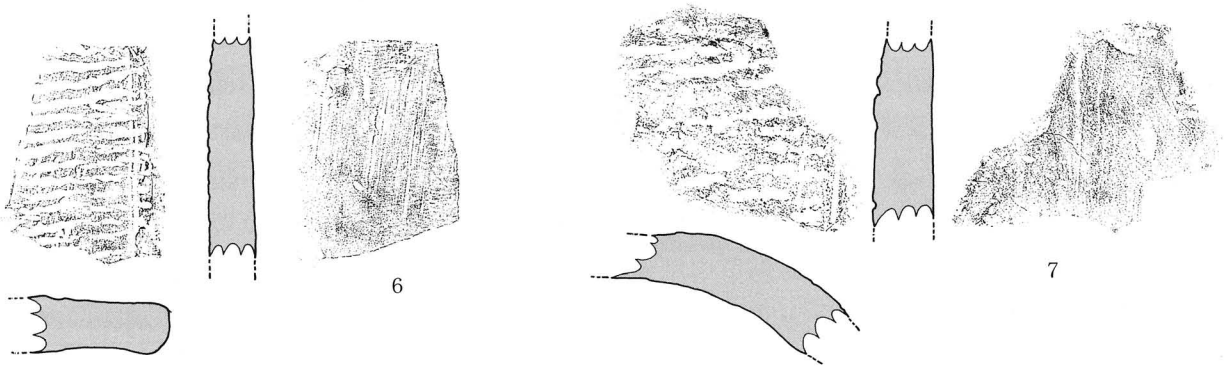


Fig 7　3-1 ～ 6 地点出土遺物実測図　(S = 1/4)

ことはできなかった。14 地点では、幅 3.3 m・深さ 0.33 mで、周溝までを含めると復元推定径 32.8 mにもなる。さらに、これを基に図面上で復元すると、本地点の東に隣接している西都原古墳群第 259 号は、この消失円墳が小さくなって残っているものである可能性が高いことが判明した。

出土遺物：周溝内から土師器・須恵器・陶磁器・瓦等が出土しているが、8 ～ 9 世紀にかけてのものが主体であり、残念ながら古墳の時期を特定する遺物は確認できなかった。

今回は、周溝から出土した遺物の中から、特徴的なものを抽出して掲載した。8 は須恵器甕の口縁部で、「く」字状に外反し、口唇部は丸くおさめられている。口縁下部から縦方向の平行叩きが施されて

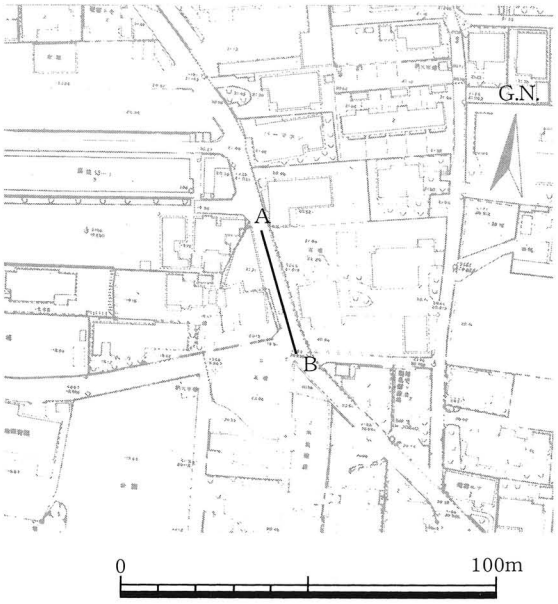


Fig 8　3-12 ～ 14 地点位置図　(S = 1/2,000)

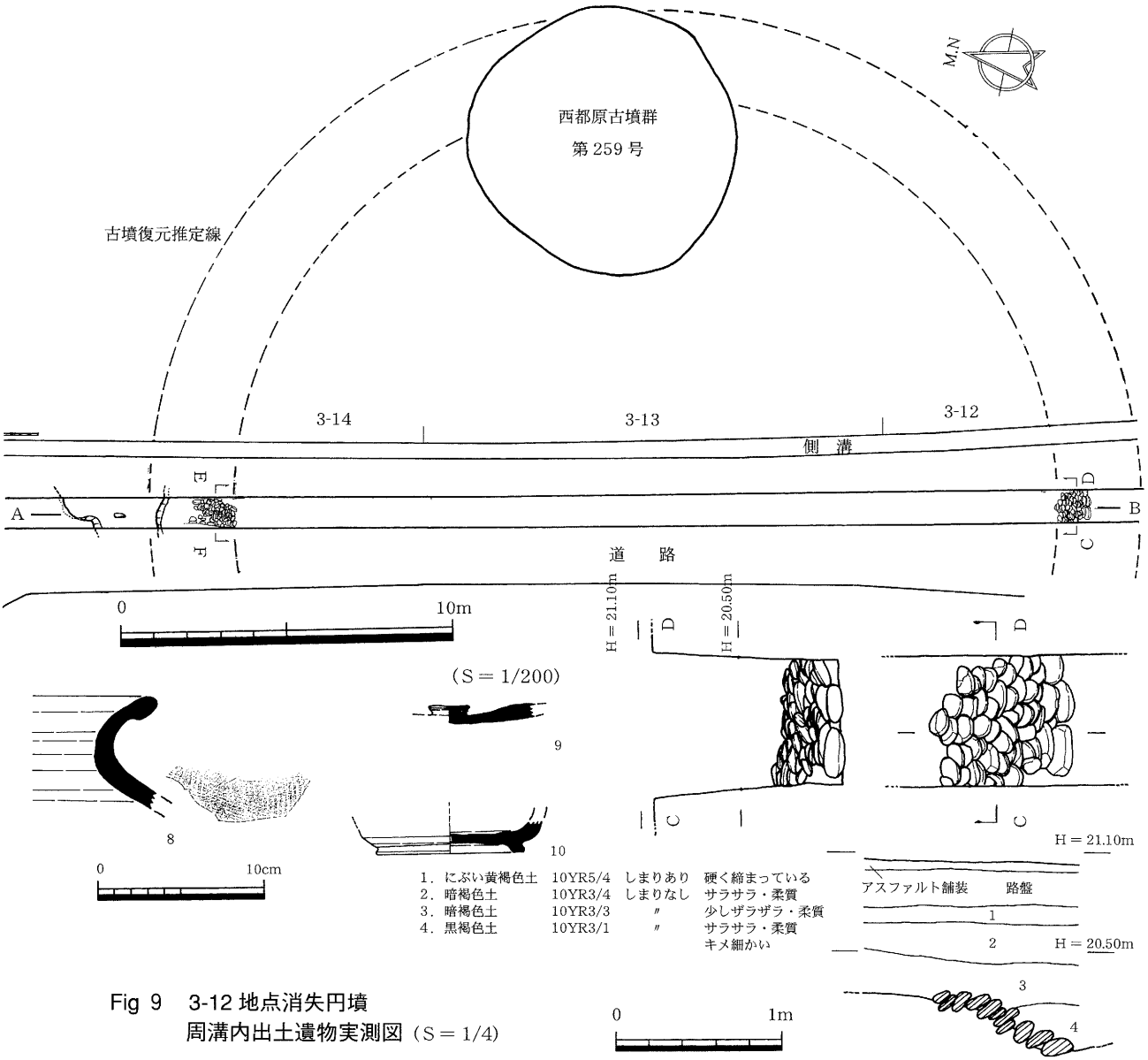


Fig 9　3-12 地点消失円墳
周溝内出土遺物実測図（S＝1/4）

Fig10　3-12 地点消失円墳葺石及び土層図（S＝1/40）

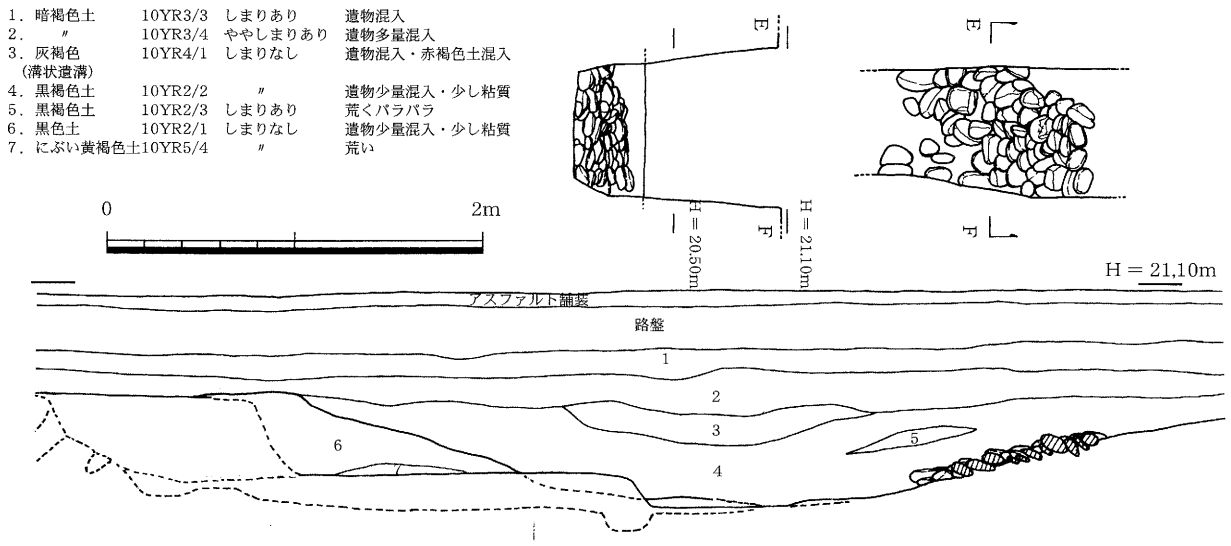


Fig11　3-14 地点消失円墳葺石及び土層図（S＝1/40）

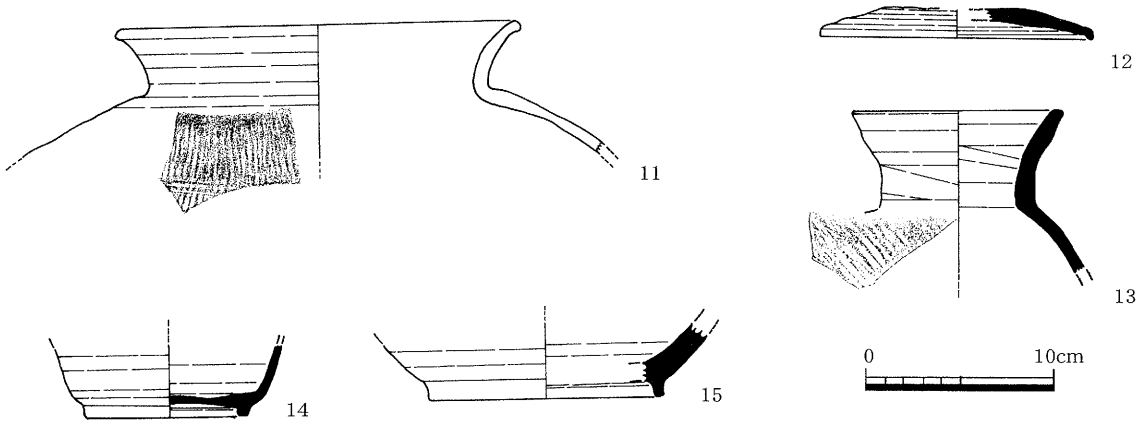


Fig12　3-14 地点消失円墳周溝内出土遺物実測図　（S＝1/4）

いる。9 は須恵器坏蓋で、つまみは低く平らで外面は回転ナデ、内面は不定ナデ調整である。10 は須恵器椀の底部で、高台は短く外方向に向き、接地部は少し窪んでいる。底部径 6.1 ㎝、高台裾径 9.0 ㎝を測る。外面は回転ナデ調整で、一部自然釉が付着している。内面は回転ナデ後不定ナデ調整である。11 は土師器壺の口縁部から胴部にかけてのもので、口縁部復元径 20.9 ㎝を測る。口縁部はヨコナデ、胴部は縦位の平行叩きに横位の平行叩きが施されている。内面は摩滅が著しく調整が見えにくいがヨコナデ調整と思われる。12 は須恵器坏蓋であるが、端部は丸く、かえりはない。復元口径 14.4 ㎝、両面回転ナデ調整である。13 は横瓶の口縁部と思われる。口径 11.3 ㎝で、口縁部は両面回転ナデ調整であるが、外面胴部には右下斜め方向の平行叩きが施されている。14 は須恵器椀の底部から体部にかけてのもので、境目はシャープさを欠き丸い。高台は短く少し内側を向き、接地部は平坦である。現存器高 3.9 ㎝、底部径 7.4 ㎝、高台裾径 8.8 ㎝を測る。両面回転ナデ調整である。15 は須恵器椀の底部で高台は短く外方向に向き、接地部は平坦である。体部は外側に大きく開きながら直線的に延びる。両面回転ナデ調整である。

4. 4 区の調査（Fig2）

A. 遺跡の現況

4 区は、3 区（市道 301 号線）の南側と北側に挟まれた中央部分の総延長 305 m で、調査面積は 305 ㎡である。調査区は 4-1 ～ 31 地点の計 31 地点で、最も長い区間である。地形的には両サイドを台地に挟まれた低地の 1 地点（標高 17.7 m前後）から、徐々に市道を北に登りながら進み、中央部の 15 地点あたりから周囲と同じ高さ（標高 19.9 前後）になり、31 地点（標高 20.8 m前後）に至っている。その比高差 3.1 m を測る。

B. 遺構と遺物（Fig13、14, 15, 16）

4-1 ～ 3 地点：3 区の 1 ～ 6 地点で確認した旧河道の延長にあたる部分で、ここでも土が 4 層に堆積している。その深さは約 1.2 m を測る。

3-20 地点：20 地点は 3 区のほぼ中央部に位置している。標高 19.9 m前後で、周辺には住宅が密集している。

20 地点周辺はアカホヤ火山灰層が遺存しており、その検出面の深さは 0.7 m前後を測る。基本的にはコンクリート舗装及び砕石（路盤）を剥ぐと、非常に硬くしまった黒色土が現れ、その下が少ししまりのある遺物を包含した黒色土となり、そして、アカホヤ火山灰層となっている。

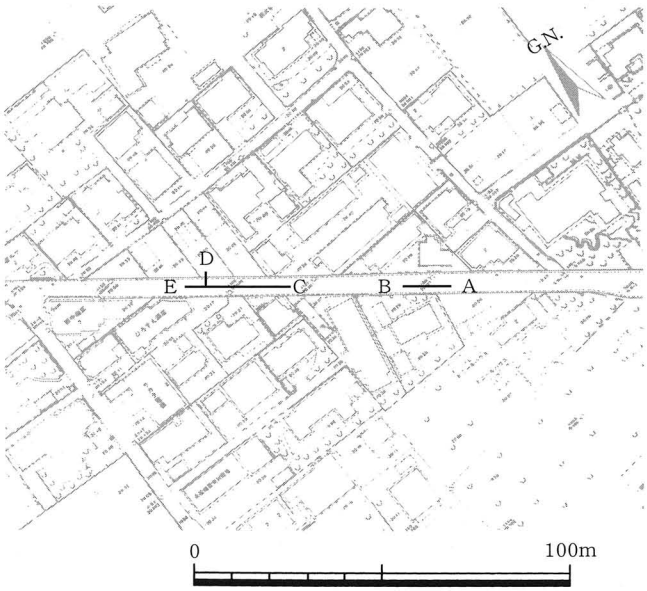
遺構としては、竪穴式住居跡２軒、柱穴８個を検出した。１号住居跡は方形プランのもので、カマドを有するタイプのものである。検出しているのは、北辺のカマド部分と東辺の一部分のみで規模については判断がつきにくいが、カマドが中央に据えてあると仮定すれば一辺約 5.0 mの竪穴式住居跡ということになる。検出面から床の深さは 0.20 mを測る。現道路面から検出面の深さは 0.65 mで、主柱等は検出できなかった。カマドは上から圧迫を受け、押し潰されたような状況で検出された。検出範囲は南北 0.38 ×東西 0.35 mで、高さは 0.31 mである。また、カマドは灰白色粘質土で造られ、底面はかなり火を受けたようで赤褐色に変色して、凹レンズ状に窪んでいる。その底面と灰白色粘質土に挟まれて、炭化物と焼土を大量に含んだ層が確認できる。

出土遺物：遺物は土師器が多く、その他須恵器・磁器・陶器・瓦等が出土している。1・2 は土師器小皿で、ヘラ切り底である。1 が口径 7.3cm、底径 5.9cm、器高 1.2 cmを測り、底部と体部の境目はシャープである。底部から直線的に開きながら口縁部に至っている。両面ヨコナデ調整である。2 は口径 7.6cm、底径 6.4cm、器高 1.2 cmを測り、底部と体部の境目には段を持つ。底部から直線的に開きながら口縁部に至っている。端部は丸い。3 は土師器坏で、底部と体部の境は丸みを帯びている。底部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反している。ヘラ切り底で、両面ヨコナデ調整であるが、内面は摩滅が著しい。4 は土師器坏蓋で、幅 2.4 cm、高さ 0.9 cmの低くて平らなつまみを有している。端部は丸く、かえりはない。口径 14.8 cm、器高 3.9 cmを測る。両面ヨコナデ調整である。5 は須恵器坏蓋で、口唇部には凹線が施されている。端部は丸い。復元口径 14.4 cm、両面回転ナデ調整で、カマド内から出土している。6 は須恵器壺蓋で、つまみは断面三角形状で、口径 8.8 cm、つまみを含めると器高 2.4 cmを測る。両面回転ナデ調整で、外面には灰かぶりあり。7 は須恵器壺の口縁部で、「く」字状に外反しているが、さらに口唇部で外側に開く。外面には頸部から下に叩きが施されている。外面口縁部と内面は回転ナデ調整である。8 は須恵器坏蓋で、口唇部には凹線が施されている。端部は丸い。外面は回転ナデ、内面は回転ナデ後不定ナデ調整である。9 は須恵器椀で、短くて若干外を向いた高台が付き、接地部は平坦である。底部と体部の境目は丸く、直線的に開きながら立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反している。端部は丸い。復元底径 9.4 cm、復元高台裾部径 8.5 cm、器高 4.2 cmを測る。外面は回転ナデ調整、内面の底部は回転ナデ後縦方向のナデ調整である。

4-22 ～ 27 地点：20 地点の延長である 22 ～ 27 地点等から 10 軒もの竪穴式住居跡を検出している。狭範囲の調査のため規模等について明確にするのは難しいが、一辺は約 2.8 ～ 5.2 mの方形プランで、灰白色の粘質土が確認されることから、26 地点同様にカマドを有するタイプのもの（25・27 地点）が含まれているようである。

27 地点の竪穴式住居跡はカマドを有するもので、一辺 5.2 mの規模を有している。出土遺物は全体的に土師器小皿が圧倒的に多い。これがもしこの竪穴式住居跡に共伴するものであれば、時期的には 10 世紀から 11 世紀頃に比定される。

出土遺物：遺物はほとんどが土師器で、その他須恵器・磁器・石錘等が出土している。10 は土師器坏の口縁部で、内湾しながら口縁部に至っている。ヘラ磨き調整が施されているが、摩滅が著し



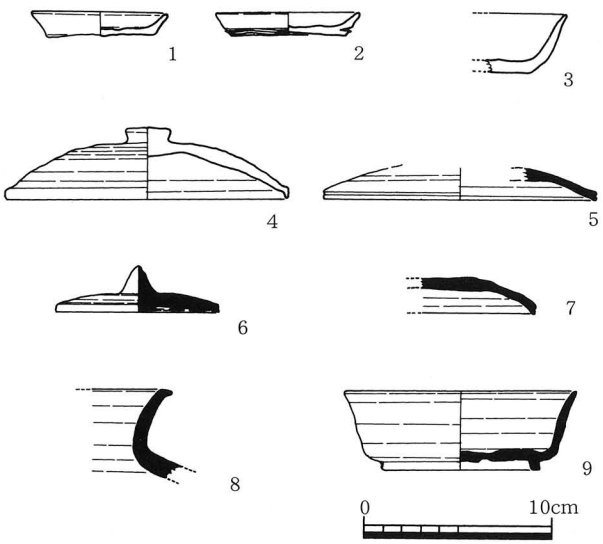
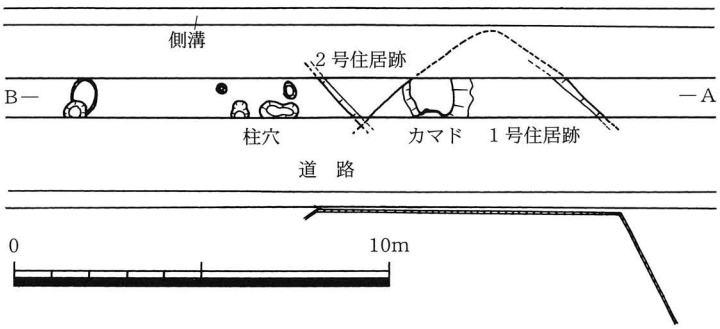


Fig13　4-20・25～27 地点位置図（S＝1/2,000）



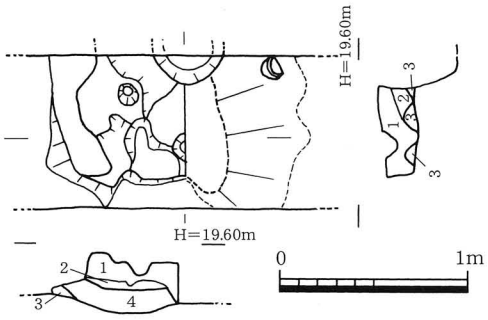


Fig14　4-20 地点遺構分布図及び 1 号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図（S＝1/200、1/40、1/4）

1.	浅黄橙色	10YR8/3	しまりあり	遺物混入
2.	橙　色	2.5YR6/8	〃	遺物多量混入
3.	橙　色	5YR7/4	しまりなし	これらに炭化物が混入して混ざりあっている(焼土)
	橙　色	5YR6/8		
	にぶい橙色	5YR6/4	〃	
4.	橙　色	7.5YR6/6	〃	ザラザラ・粒子粗い(焼土)

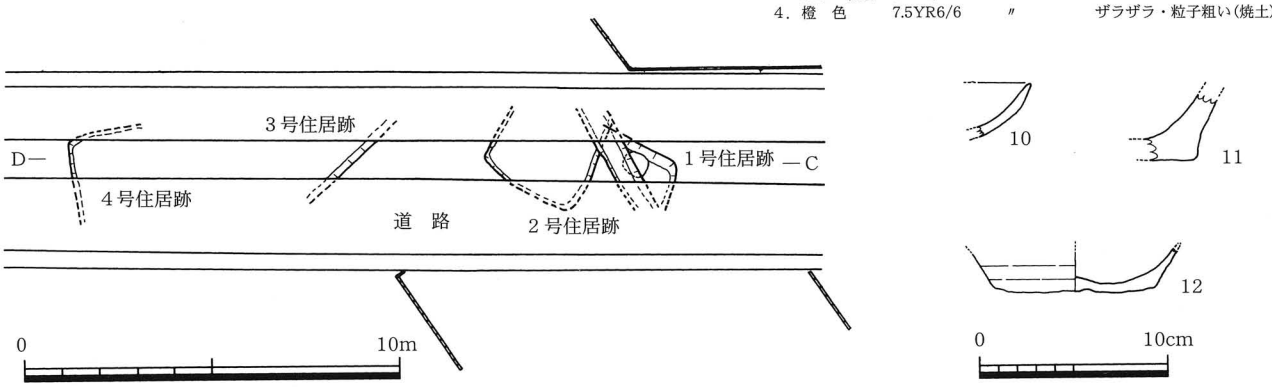


Fig15　4-25・26 地点遺構分布図及び住居跡内出土遺物実測図（S＝1/200，1/4）

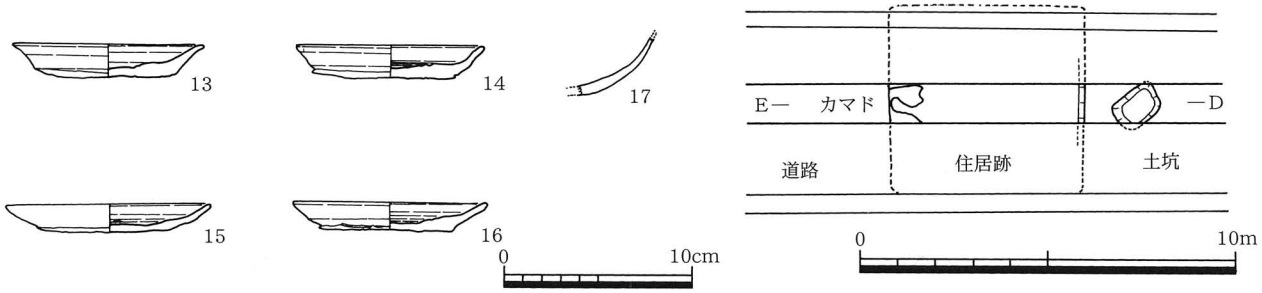


Fig16　4-27 地点遺構分布図及び住居跡内出土遺物実測図（S＝1/200，1/4）

い。11は土師器甕の底部で、両面ナデ調整である。12は土師器坏の底部から体部にかけてのもので、その境目はシャープではないが確認できる。復元底径8.4㎝、ヘラ切底で両面ヨコナデ調整であるが、摩滅が著しい。13～16は土師器小皿であるが、底部と体部との境がはっきりしているもの(13)段状になっているもの（14・16）丸味を帯びているもの（15）等がある。いずれも、ヘラ切底で、両面ヨコナデ調整である。13は復元口径10.0㎝、底径7.6㎝、器高1.7㎝、14は口径10.2㎝、底径6.2㎝、器高1.7㎝、15は口径10.8㎝、底径6.9㎝、器高1.5㎝、16は口径10.3㎝、底径7.1㎝、器高1.5㎝を測る。17は土師器坏の底部から体部であるが、丸く内湾しながら口縁部に至っている。摩滅が著しく調整は不明である。なお、10～12は25地点、13～17は27地点から出土したものである。

5、5区の調査(Fig 2)

A、遺跡の現況

本調査区は堂ヶ嶋遺跡である。現況はアスファルト舗装された市道299号線である。総延長210m、総調査面積210㎡を測る。

B、遺構と遺物（Fig17）

5-1～10地点：延長約120m、面積約120㎡を測る。1地点から2地点にかけては地山が残るが3～10地点には地山はなかった。2地点で地形が落ち込み、黒色シルト質の泥層が深く堆積する地層に変わる。現在の逢初川の旧河道にあたり、広く湿地帯であったと考えられる。堆積する泥層のため地盤が軟弱であったと考えられ、路盤が非常に厚く敷設されており、約60cmを測る。黒色泥層は遺物を包含し、時期に差があるが、土師器や陶磁器が出土した。

路盤を除去した深さで湧水があり、調査は難航した。

5-11～19地点：延長約90.0 m、調査面積90㎡である。本調査区の南側に隣接して円墳（西都原古墳群第260号）が所在しているが、この円墳の周溝が確認される可能性があった。

地形的には13地点から徐々に登り19地点に至っているが、その比高差は約1.85mを測る。11地点ではアスファルト舗装及び砕石を剥ぐと、黒褐色土層になり、そして、礫層になっているが、13地点からは地形が落ち込み、黒褐色土層の下に黒色泥層が確認できる。15地点では、さらに、その下に黒色土、そして、アカホヤ火山灰層が遺存している。しかし、このアカホヤ火山灰層が確認できるのも15地点だけで、16・17地点では黒褐色土層を掘り下げるとすぐに礫層となっている。さらに、18・19地点では明黄褐色ロームが確認され、その下が礫層となっている。つまり、15地点周辺では自然地形が残ったままで土が堆積し、16地点から19地点にかけては削平されたことを示している。それが、南側に隣接した円墳に起因していることなのか狭範囲の調査のため判断がつかない。

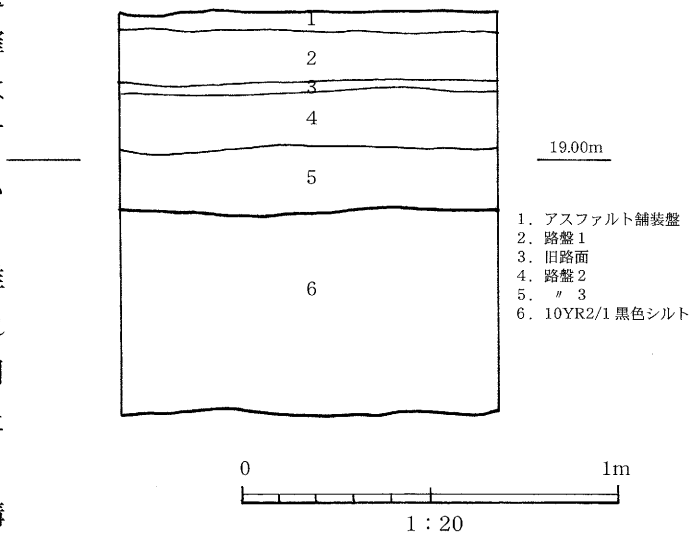


Fig17　5-4地点基本層序

遺構としては、16地点と17地点で溝状遺構を検出している。時期は遺物が共伴しておらず不

明である。なお、円墳の周溝は慎重に掘削を進めたが、確認することはできなかった。
遺物は、黒色泥層が遺物を包含しており、土師器・須恵器・陶磁器等が出土した。

6、B区の調査(Fig2)

A、遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡である。現況はアスファルト舗装された市道である。調査区は下水道の枝線となる路線で、短い区間が数箇所にわたる。総延長は272mで調査面積は218㎡である。

B、遺構と遺物(Fig18 Fig19)

B-1～5地点:市道291号線より北に入る袋小路で約54mである。1、2地点では遺物包含層のみで遺構はなかったが、3～5地点にかけては溝状遺構2条と竪穴住居跡と考えられる掘方を検出した。

過去に畑地として利用されていたため、耕作土が旧地表の上に堆積しており、いずれも現地表面から約50～70cmで検出した。溝状遺構は幅約45cm、125cm、検出面からの深さ約30cmである。竪穴住居跡と考えられる遺構は3～4地点に2軒、5地点に1軒ある。4地点で検出した堀方は検出面より約35cmの深さで、カマド跡と考えられる焼土と粘土によるプランも検出した。プランは不整円形で、約1.2mである。土師器片多く伴って出土した。柱穴らしき掘方もあり、須恵器や土師器など、多くの遺物が出土した。3～4地点にかけて検出できた堀方間は9mであるため2軒の竪穴住居跡が切り合っている可能性が高い。5地点において検出した堀方は対応する立ち上がりが出なかった。竪穴住居跡の上に異なる埋土による遺構群があり、土坑やピットが検出された。土坑は長軸150cmで寛永通宝が出土し、近世土坑墓の可能性がある。

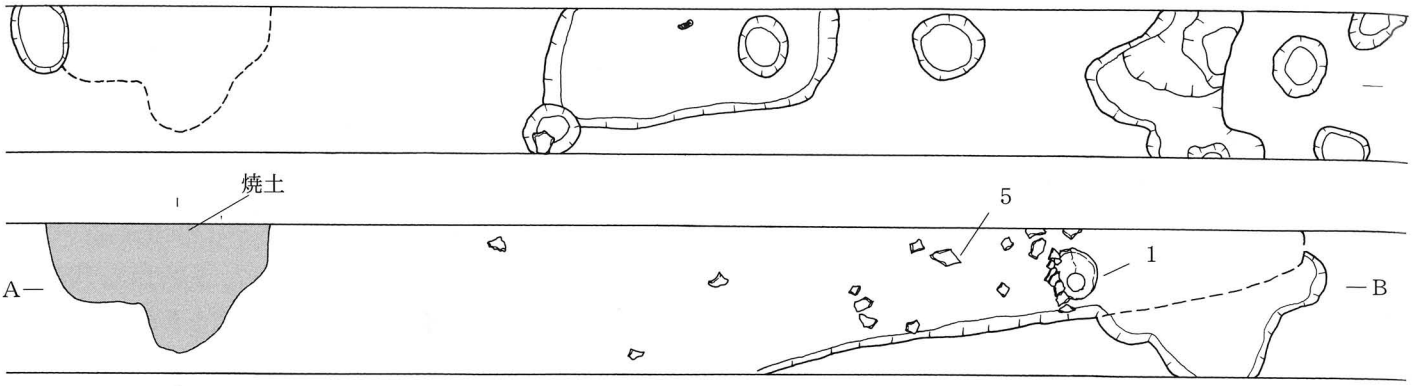
出土遺物:1は土師器で大型鉢である。口径24.5cm頸部径21.8cm、胴部最大径21.3cm、底径8.0cmを測る。胎土は粗粒で褐灰色、褐色粒が多く混じり長石、石英も含む。ベースになる粘土は精良で密でない。内外面ともに黒斑を有し、10YR7/4にぶい黄橙色を呈す。外面口縁部は工具横ナデ、胴部は粗いミガキ状のナデで、粘土帯の接合痕が残る。底部は不定ナデで胴部に向かってナデ上げる。内面は口縁部を工具横ナデ、胴部は横ミガキ、底部付近は縦ミガキを丁寧に施し、外面とは対象的に粘土帯の接合痕はほとんど見えない。2は土師器深鉢で復元口径16.2cm、色調胎土とも1と似る。外面口縁は工具横ナデ、胴部は細い幅の縦ナデが断続で施される。内面は工具で斜めナデが施される。3は甕破片で、復元口径18.6cm、頸部径15.6cm、胎土は1と似て、色調は10YR浅黄橙色を呈す。口縁部は工具横ナデで、外面は縦の平行叩きが施される。内面は斜めの工具ナデである。4は須恵器の坏身で、復元口径11.0cm、受部径12.0cm、受部最大径13.4cmを測る。色調は内外面10BG5/1青灰色で胎土は緻密、焼成は良好である。5は須恵器の大甕破片で、外面に擬格子目叩き、内面は同心円当て具痕、色調は内外面とも5Y4/1～4/2灰色を呈し、焼成は良好で内面に灰かぶりが見える。胎土はやや粗めで長石が多く混じる。

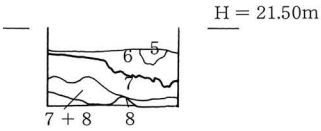
B-6～12地点:市道288号線から西に入りこむ路地で市道287号線である。6地点では溝状遺構とピットを確認した。溝状遺構の幅は約115cm、深さは約30cmである。土師器や須恵器片が出土した。7地点では等間隔に並ぶ柱穴と考えられる堀方を確認した。柱穴はいずれも径約60cm、検出面からの深さ約20cmを測る。

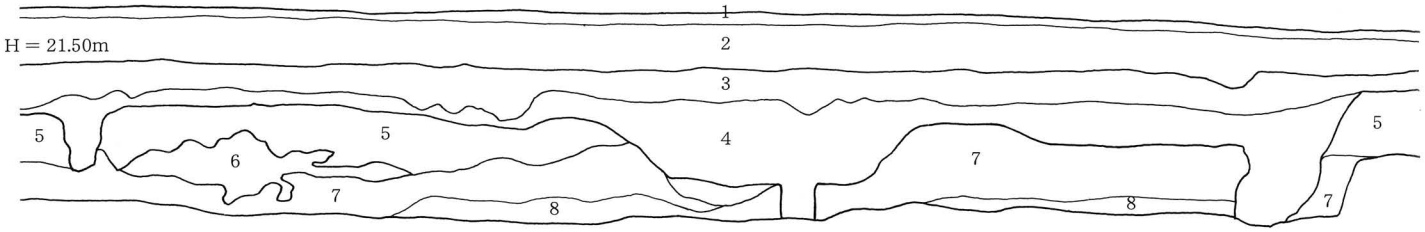
B-13～15地点:市道288号線から東に入り込む袋小路である。現地表面から約80cmで検出面に至る。ピット、溝状遺構を検出した。溝状遺構は幅25cm、深さ34cmを測る。

B-16、17地点:16地点は288号線延長線にあり、17地点は287号線の延長にあるが、双方とも

B-4 地点



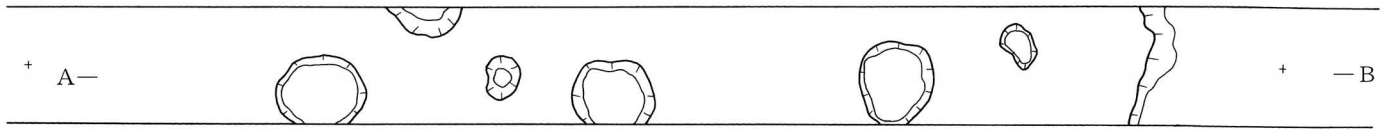


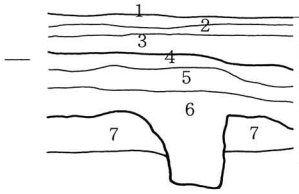


1．アスファルト舗装盤
2．砕石（路盤）
3．10YR3/2 黒褐色土　軟質（耕作土）
4．10YR3/2 黒褐色土（近世埋土）
5．10YR2/1 黒色土にアカホヤ火山灰塊まじる
6．5YR4/4 赤褐色土（カマド跡）
7．10YR1.7/1 黒色土（住居埋土）
8．10YR3/1 黒褐色土（地山）

0　1　2m
1：40

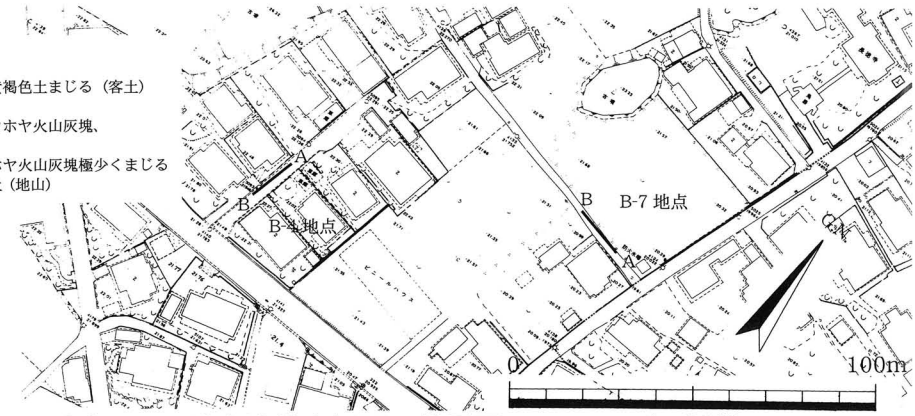
B-7 地点





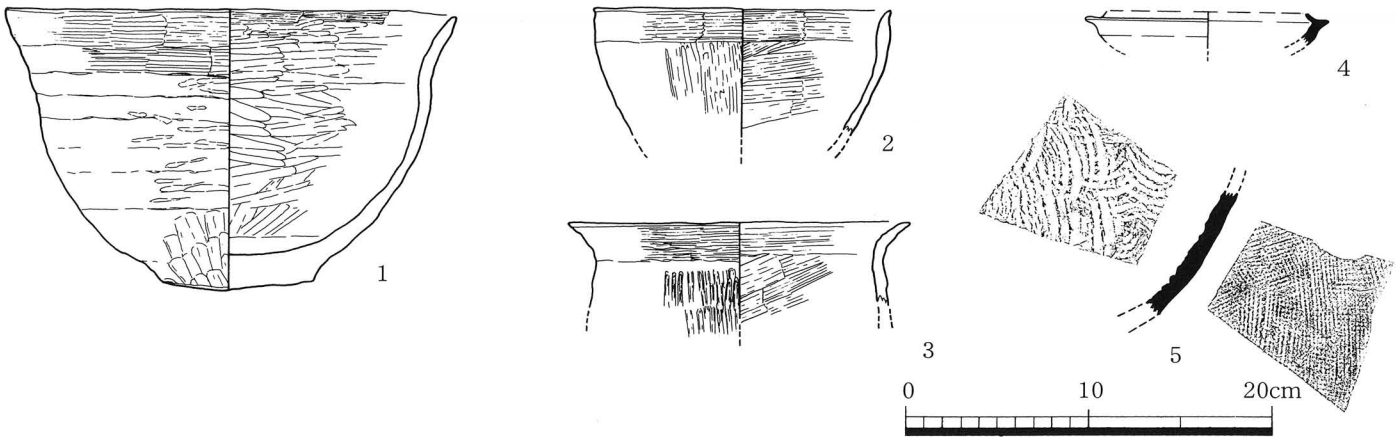
1．アスファルト舗装盤
2．砕石
3．10YR3/1 黒褐色土に明黄褐色土まじる（客土）
4．10YR3/2 黒褐色粘質土
5．10YR3/1 黒褐色土にアカホヤ火山灰塊、黒褐色粘土塊まじる
6．10YR2/1 黒色土にアカホヤ火山灰塊極少くまじる
7．10YR3/1 黒褐色硬質粘土（地山）

0　1　2m
1：50



1：2,000

Fig18　B-4 地点、B-7 地点遺構実測図、位置図



1：4

Fig19　B-4 地点出土遺物実測図

宅地造成時や道路舗装時に旧地形が削平されており、地層、遺構は残存していなかった。

7、C区の調査(Fig2)

A、遺跡の現況

本調査区は法元遺跡である。下水道の本線から分岐する枝線にあたり、市道291号線から南に入り込む路地で、幅員は狭い。日向国府跡の北側にあたり、地形も比較的よく残存しているため、関連施設や同時期の集落等が所在する可能性が高い。総延長約486mで総調査面積389㎡を測る。

B、遺構と遺物（Fig20、Fig21）

C-1～5地点:市道302号線で遺構検出面は現地表面から約80～100cmであり、路線の脇に水道管が敷設されていたが、検出面よりも上に敷設されていたため遺構は残っていた。1地点の遺構は、竪穴住居跡と床に設置された地床炉、それに伴い土師器の埋甕も出土した。検出面からの深さは約30cmである。また住居跡とは別に方形堀方の柱穴を1基確認した。半裁すると柱を抜き取った跡に粘土を詰めており、中に礫があったので根石と考えた。掘立柱建物の所在を示すものだろう。堀方は一辺約85cmで検出面からの深さは35cmである。

2地点から4地点にかけては、竪穴住居跡が数軒切り合っているものと考えられる。焼土と黄褐色の粘土が偏って検出されるプランがあり、カマド跡と推定した。約80cmの深さまで下げると黒色土中にアカホヤ塊と褐色土が混じる遺物包含層が堆積し、約25cm下げると硬化面または黒褐色の地山に至りピットが検出できる。中にはしっかりした深さを持つ堀方があり、柱穴の跡と推定できるものがある。切り合い関係を捉えることはできなかったため竪穴住居跡の規模は推定できない。

5地点ではアカホヤ火山灰層の地山が検出でき、4地点から続く竪穴住居の堀方を確認できた。住居跡埋土中からは、須恵器や土師器が多量出土し、共伴関係を押さえることができる。竪穴住居跡堀方の検出面から床までの深さは約40cmを測る。

C-6～10地点:調査区は延長で38㎡である。民家の間を通る路線で、アスファルトによる舗装はされていないため路盤は弱く、掘削幅は狭い。6～10地点までがあたる。

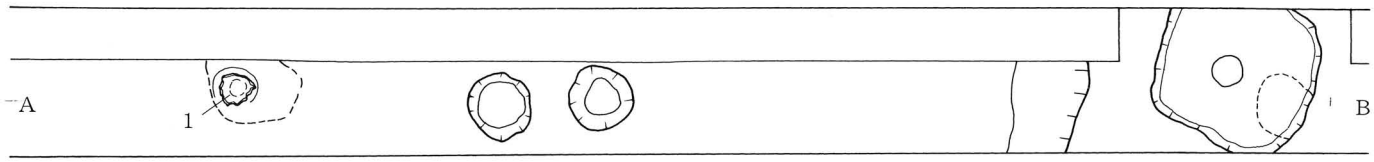
6地点においてはピットを3基検出した。1基は堀方もしっかりしており、埋土に黄褐色の粘土が混じり、掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高い。検出面は現地表から約100cmの深さである。7地点では、溝状遺構や土坑、性格不明の遺構を検出した。遺構に伴い、土師器破片が出土した。8地点では、7地点から続く土坑から、土師器が一括で出土した。他に掘立柱建物の柱穴堀方1基とピットを検出した。9地点では、約20cmの深さの堀方とピットを検出した。竪穴住居の可能性があるがはっきりしない。10地点では検出面から約30cmの深さである堀方を検出した。遺構の性格ははっきりしないがピットを伴う。

C-11～18地点:調査区は袋小路の市道304号線で、11地点では住居跡の可能性がある堀方を検出した。堀方は3基で、全体像は不明であるが、検出面からの深さは約10cmの浅いものである。埋土やその上層は遺物を多く含む。その他、土坑と考えられる堀方やピットも検出した。

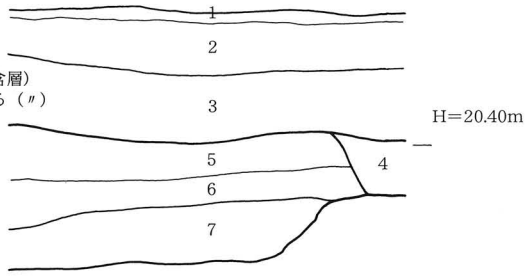
12地点では、溝状遺構を検出した。埋土が異質であり、時期の違いを示すものか。埋土中より、須恵器片などの遺物が多く出土した。

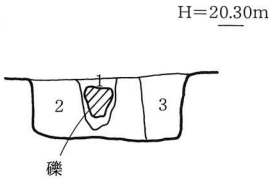
13地点ではピットや掘立柱建物を構成する柱穴の一部を検出した。ピットのうち3基の堀方は等間隔で並び、検出面からの深さも約50cmで均質なため柱穴と考えた。

C-1 地点



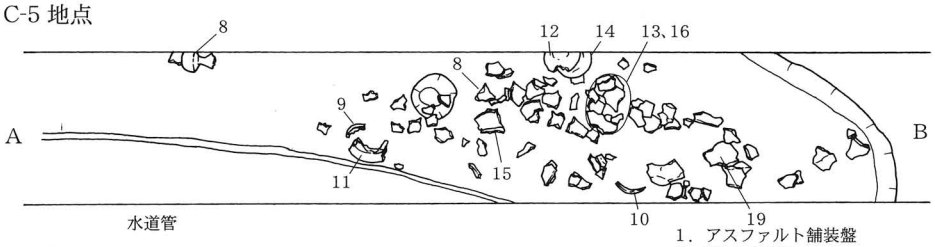
1．アスファルト舗装盤
2．砕石（路盤）
3．10YR3/2 黒褐色土（耕作土）
4．10YR1.7/1 黒色土
5．10YR3/1 黒褐色土に黄褐色粘土塊まじる（遺物包含層）
6．10YR3/1 黒褐色土にアカホヤ火山灰塊極多くまじる（〃）
7．10YR2/1 黒色土 にアカホヤ火山灰塊多くまじる

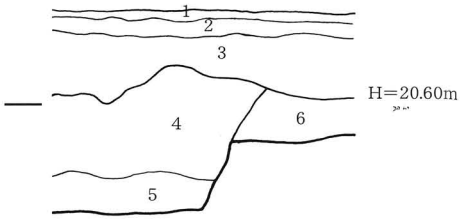




1．10YR7/6 明黄褐色粘土
2．10YR2/1 黒色土に明黄褐色土まじる
3．10YR4/4 褐色土（撹乱）

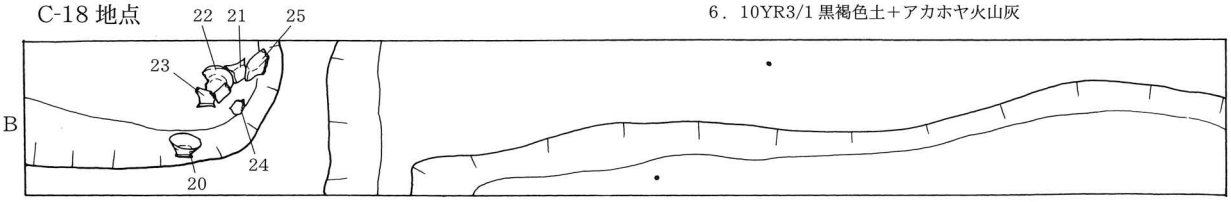
C-5 地点

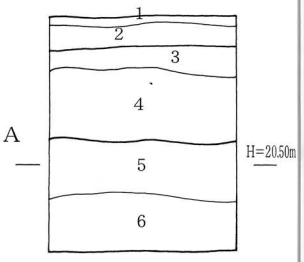




1．アスファルト舗装盤
2．砕石（路盤）
3．10YR3/2 黒褐色土（制作土）
4．10YR2/1 黒色土＋アカホヤ火山灰塊（住居埋土）
5．10YR2/1 黒色土＋アカホヤ火山灰塊＋褐色粘土（貼り床？）
6．10YR3/1 黒褐色土＋アカホヤ火山灰

C-18 地点

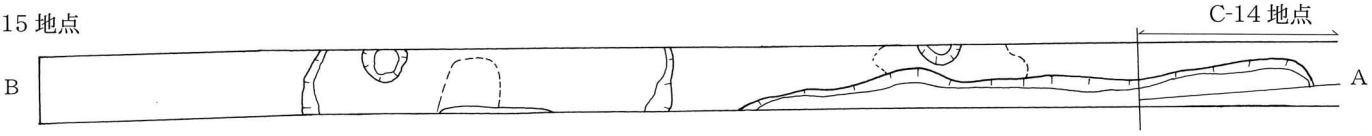




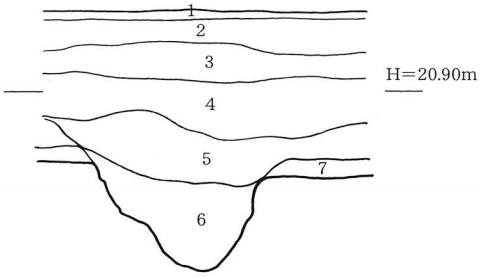
1．アスファルト舗装盤
2．砕石（路盤）
3．10YR3/3 黒褐色土（客土）
4．10YR3/1 黒褐色土
5．10YR3/2 黒褐色土（住居埋土）
6．10YR3/1 黒色土　（　〃　）

0　1　2m
1：40

C-15 地点



0　5m
1：100



1．アスファルト舗装盤
2．砕石（路盤）
3．10YR3/2 黒褐色土
4．10YR3/4 暗褐色土
5．10YR8/8 黄橙色、2.5YR7/8 橙色粘土
6．10YR1.7/1 黒色土
7．10YR2/1 黒色土＋アカホヤ火山灰塊

0　1m
1：40

0　50　100m
1：2,000

Fig20　C 区遺構実測図

14 地点では柱穴と考えられる堀方と溝状遺構を 2 基検出した。溝状遺構は幅 40cm で深さ約 30cm である。その他ピットと 15 地点に続く竪穴住居跡の堀方を検出した。15 地点では 14 地点からの竪穴住居跡と不明遺構が確認された。竪穴住居跡には住居の外側に取り付くカマドがあった。カマド跡の粘土を除去すると下から径 40cm、深さ 30cm の堀方を検出した。16 地点では 3 条の溝状遺構を検出した。幅は 0.7m ～ 1.3m とそれぞれ違い、深さは約 20cm でほぼ 3 条とも同じである。17 地点では竪穴住居跡が切りあった形か段差のある構造のものを検出した。堀方は 18 区まで続く。堀方の外側に沿い、柱穴が並ぶ構造である。18 地点では 17 地点から続く堀方と、別に土坑を検出した。調査範囲が狭いため遺構の全体像はわからないが、土坑内からは土師器坏、椀が出土した。良好な共伴資料になる。

C-19 ～ 25 地点:11 ～ 18 地点と直行する市道 1199 号線で、水道本管が敷設されており地層の残存状況は悪い。遺構の密度や遺物出土量も少ない。溝状遺構とピット、性格不明の堀方が検出できた。

C-26 ～ 36 地点: 調査区は市道 305 号線になる。調査区に沿い、水道管が敷設されており、大きく撹乱を受ける。埋設管が約 1.3m の深さにあるため、遺構、遺物の密度も低かった。総延長は約 226m、面積約 180 ㎡を測る。29 ～ 30 地点にかけて水道管の埋設が調査区からそれたことから、しっかりした堀方の溝状遺構と考えられる遺構を路線に沿って検出した。遺物も纏まって出土した。

その他はピットや部分的に残る溝状遺構程度で、遺物の出土量も少ない。

出土遺物:1 ～ 7 は C-1 地点竪穴住居内出土遺物で、1 は土師器埋甕底部で、地床炉として用いられ、底部に穿孔がなされる。胎土は粗粒で締まらず褐色、褐灰色粒が多く混じる。色調は外面 10YR7/4 にぶい黄橙色～ 5/1 褐灰色で黒変があり内面は 10YR6/2 灰黄褐色を呈す。外面は底部をケズリ状の粗いナデ、胴部を 5mm ほどの幅で、斜めに粗くナデ上げ、粘土帯の接合痕が見える。内面は斜めの工具ナデ。2 は須恵器椀で、外側に開く高台が付く。底径は 8.1cm を呈す。色調は内外面 2.5Y7/1 灰白色、胎土は精良、緻密である。3 は須恵器坏蓋で、かえり部で 7.8cm、最大径で 10.2cm を測る。胎土は粗粒で長石、石英が混じる。色調は内外面 5Y6/1 灰色を呈す。4 は土師器皿破片で復元口径 15.2cm を測り、胎土は褐色粒、石英、長石が混じる。色調は内外面とも 5YR5/6 明赤褐色を呈し赤色塗彩が施される。調整は摩滅が著しく不明である。5 は土師器坏破片で復元口径 11.2cm を測る。口縁部は横ナデ、体部は縦にオサエ状のナデ、内面に暗文状の条痕を底部に向かって施す。色調は内外面 10YR8/4 浅黄橙色、胎土は精良な粘土をベースに褐色粒、長石が混じる。6 は甑の取手で、2.0 × 2.5cm の断面径で全面不定ナデが施される。7 は土師器浅鉢の破片で、胎土は精良の粘土に褐色粒が混じる。色調は外 7.5YR7/8 黄橙色、内 2.5YR6/6 橙色で、外面にミガキ施される。

8 ～ 19 は C-5 地点竪穴住居内出土遺物である。1 は須恵器瑞で残存器高 12.8cm、頸部径 3.6cm、胴部最大径 9.7cm を測る。底部～胴部の下 1/2 に轆轤左回りの回転ヘラケズリを施し、以上を轆轤左回りの回転ナデ、頸部内面に強いシボリ痕が残る。胴部中央に注口を挿入する穿孔がなされ、外面周辺が剥離している。頸部に 2 条の沈線を施す。口縁は欠損しており、上方に向かいさらに開く形態をとる。色調は内外面 10GY4/1 暗緑灰色で灰かぶりあり。胎土は緻密で長石、石英が混じる。9 は須恵器坏身で、復元口径 12.0cm、受部径 12.8cm、受部最大径 13.9cm である。内外面に回転ナデを施す。色調は内外面 2.5Y7/1 灰白色で、胎土は精良軟質で砂粒はほとんど含まない。焼成は軟質で胎土に起因するものか。10 は坏蓋破片で復元径 11.1cm、色調内外面 7.5YR6/1

灰色を呈し、胎土は粗粒で長石、石英が混じる。焼成は堅緻である。11 須恵器大甕の口縁部破片で、復元口径 27.2cm、頸部径 21.0cm を測る。色調は内外面 10Y4/1 灰色で胎土は精良緻密で、焼成は堅緻、口縁部は回転ヨコナデ、内面は断続の工具ヨコナデが施される。12、13 は土師器坏で 12 は口径 14.9cm、器高 5.7cm、色調内外面 5YR6/8 橙色、外面に黒班あり。胎土は精良で褐色粒、黄褐色粒が混じる。内外面にミガキが施される。13 は復元口径 15.4cm、色調は内外面 2.5YR6/8 橙色、胎土は粗粒で褐色粒、長石、石英が多く混じる。内外面とも摩滅が著しい。14 は土師器深鉢で、口径 15.0cm、底径 8.0cm、器高 7.9cm、胎土精良粘土に長石、褐色粒、褐灰色粒が多く混じる。外面に黒班があり、底部から胴部にかけて縦ナデ、胴部は摩滅が著しく、粘土帯の接合痕が残る。口縁部は内外ヨコナデを施し、内面は工具による断続ヨコナデ、底部もオサエ→工具ナデを施す。15 は土師器甕口縁部破片で、復元口径 17.3cm、頸部径 15.6cm、胎土は精良粘土に褐色粒、褐灰色粒、長石が多く混じり粗い。色調は外面 10YR7/4 にぶい黄橙色、内面は 10YR6/1 ～ 5/1 褐灰色を呈し、内外面に工具ナデを施す。16 は土師器の坏か皿で、復元口径 18.6cm、色調内外面 5Y6/8 橙色、胎土は精良粘土に褐色粒、長石、石英が混じる。内外面にミガキが施される。17 は土師器大甕底部で、底径 8.3cm、色調内外面 10YR8/4 浅黄橙色、胎土は精良粘土に褐灰色粒、褐色粒、長石が混じり粗く、底部は木の葉文が残る。外面は縦ナデ、底部付近はオサエ状の縦ナデ、内面は斜めの工具ナデが施される。18 は土師器長胴甕破片で、復元口径 17.0cm、頸部径 16.1cm、胴部最大径 21.0cm を測り、色調内外面 10YR7/3 ～ 7/4 にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良粘土に褐色粒、褐灰色粒、長石、石英が多く混じる。外面は口縁がヨコナデで、胴部は摩滅が著しく、粘土帯の接合痕が残る。内面は口縁部ヨコナデで、胴部は斜めの工具ナデが施される。19 は土師器甑破片で、復元底径 7.1cm、色調内外面 10YR7/4 にぶい黄橙色を呈す。外面はミガキ状の狭い幅の縦ナデが断続で施され、内面は縦の工具ナデが施される。底部は焼成前に穿孔され縦ナデを施し仕上げられ、底部と胴部の境にも円形の径 0.9cm の穿孔がなされる。

20 ～ 28 は C-18 地点で出土した。20 ～ 25 は調査区端に検出した堀方内から共伴して出土した(Fig21)。20 は土師器の椀で断面三角形の高台が付く。口径 14.8cm、底径 7.4cm、高台径 7.5cm、器高 6.2cm(坏 5.2+ 台 1.0) を測る。胎土は精良粘土に褐色粒、褐灰色粒、長石、石英が多く混じり、色調は内外面ともに 5Y7/8 橙色を呈す。底部外面は回転ヘラ切り、坏部は底部から直線的に立ち上がり、回転ヨコナデ、内面底部は不定ナデが施される。21 は土師器椀で、外側に開く高台が付く。口径 14.5cm、底径 6.9cm、高台径 7.9cm、器高 5.8cm(坏 5.0+ 台 0.8)、胎土は精良粘土に褐色粒、白色粒、雲母が混じる。色調は内外面 2.5YR6/8 橙色を呈す。底部外面はヘラ切り後不定ナデ、坏部は底部から直線的に外側に開き、ナデの凹凸が残る回転ヨコナデ、口縁部でやや外反する。底部内面は不定ナデを施す。22 は土師器椀で外側に開く比較的シャープで先端が丸い高台が付く。口径 16.4cm、底径 8.0cm、高台径 8.8cm、器高 7.3cm(坏 5.9+1.4) を測り、胎土は精良粘土に褐色粒、長石、白砂、雲母が混じる。色調は内外面 7.5YR7/6 橙色を呈す。底部外面は回転ヘラ切り、高台と坏部の接合痕が残る。坏部は直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや外反、回転ヨコナデを施す。内面も底部から回転ヨコナデが施される。23 は土師器の椀で先端が平坦な外側に開く高台が付く。口径 16.7cm、底径 7.7cm、高台径 9.0cm、器高 7.5cm(坏 6.6+ 台 0.9) を測る。胎土は精良粘土に褐色粒、褐灰色粒、長石、雲母が混じり、色調は内外面 2.5YR6/8 橙色を呈す。底部外面は回転ヘラ切り、坏部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部に至り、回転

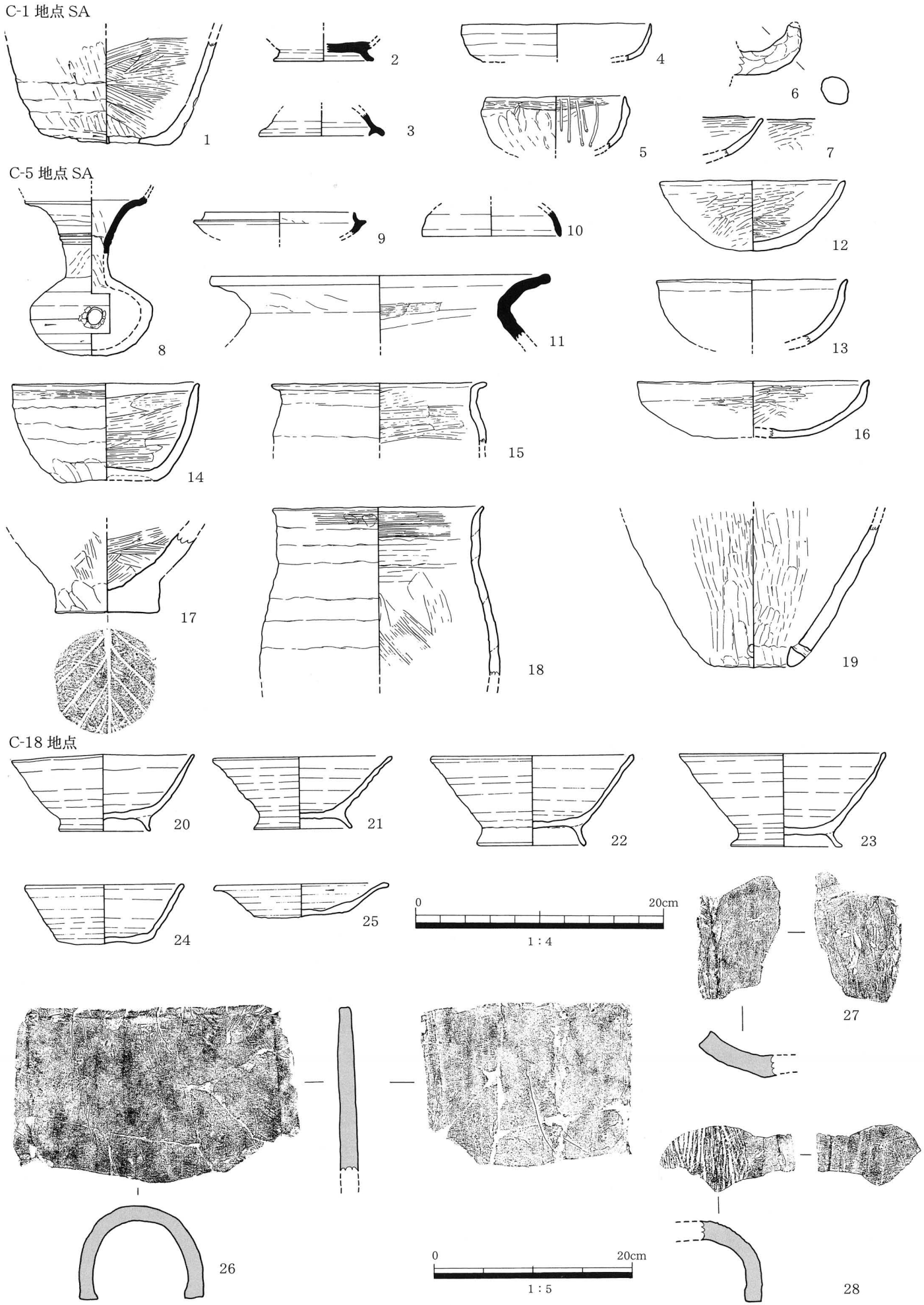


Fig21　C区出土遺物実測図

ヨコナデが施される。内面も底部から回転ヨコナデが施される。24は土師器の坏で口径12.8cm、底径7.8cm、器高4.6cm、胎土は精良粘土に褐色粒、長石、雲母が混じる。色調は外面10YR8/6黄橙色、内面10YR7/6明黄褐色を呈す。外面底部は回転ヘラ切り、坏部は回転ヨコナデを施す。25は土師器坏で、口径14.1cm、底径7.8cm、器高2.6cm、胎土は精良粘土に褐色粒、長石が混じる。色調は内外面5YR7/8橙色、底部外面は回転ヘラ切り、坏部は回転ヨコナデを施す。26～28は竪穴住居跡と考えられる堀方から出土した。26は丸瓦で、幅12.5cm、厚1.6cm、胎土は緻密でない精良粘土に褐色粒、褐灰色粒が混じる。色調は外面10RY7/2にぶい黄橙色～5/1褐灰色、内面は10YR8/2灰白色、焼成はやや還元不足である。凸面は斜めの平行叩き後工具により丁寧にナデ、叩き目を消す。端部は面取りされ、凹部は布目痕が残り、部分的に工具によりナデが施される。27は平瓦破片で、厚約2.0cm、色調内外面7.5YR7/6橙色を呈し、胎土は緻密な精良粘土に褐色粒がわずかに混じる。焼成は還元反応不足。凸部はヨコ平行叩き目を工具ナデ、ケズリで消す。凹部は布目痕が明瞭に残る。28は丸瓦破片で、厚1.2cmを測る。色調内外面7.5Y6/1灰色、胎土は精良緻密で白色粒が混じる。焼成も良好である。凸面は縦方向の平行叩きが施され、端部は面取りをする。凹面は布目痕が残り、端部付近を縦方向に工具でナデを施し布目を消す。

8、D区の調査(Fig2)

A．遺跡の現況

D区は3区（市道301号線）から枝分かれした7路線で、1・2及び18・19地点が私道、3～5地点が里道、6～9地点が市道309号線、10～17地点が市道307号線となっている。また、遺跡で分けると、1～5地点が寺崎遺跡、6～18地点が法元遺跡に含まれている。

調査区の延長は245mで、調査面積は221㎡である。地形的には1・2地点が両サイドを台地に挟まれた低地（標高17.6m前後）で幅員が狭い袋小路、3～5地点はその低地から南西に日向国府跡が所在する台地上まで登る路線、6～9地点が市道301号線より一段高く（標高20.0前後）国道219号線まで延びた路線、10～17・19地点が住宅地内（標高20.5m前後）に延びた路線、18地点が10～17地点の路線から北に延びた幅員が狭い袋小路の私道である。

B．遺構と遺物（Fig22、Fig23）

D-1～3地点：1～3地点は3区の南側調査区と同じく、旧河道内と思われ、土が幾層にも堆積している。それは2地点でⅠ層が明褐色土、Ⅱ層が黒褐色土、Ⅲ層が灰褐色土、Ⅳ層が黒色土となっているが、深さ約1.0m以下は水が湧き出てくるため調査不可能で、底面までは確認できなかった。

D-4・5地点：4・5地点は、県教育委員会によって日向国府跡（日向国衙跡）と確定された範囲の南東部端にあたる地点に位置し、標高約17.0mである。

5地点から緩やかに下り始め、4地点は傾斜地となっている。その比高差は2.06mで、傾斜角20度である。5地点では、日向国府に関連した遺構が確認できることが期待されたが、本地点はかなり削平されているようで、残念ながら検出することはできなかった。アスファルト舗装を剥ぐとすぐに黄褐色ローム層が現れ、その下層は礫層になっている。

遺物は、いずれの地点からも出土しなかったが、周辺には土師器をはじめ、須恵器・陶磁器、そして、布目瓦を含む古瓦が多量に散布している。

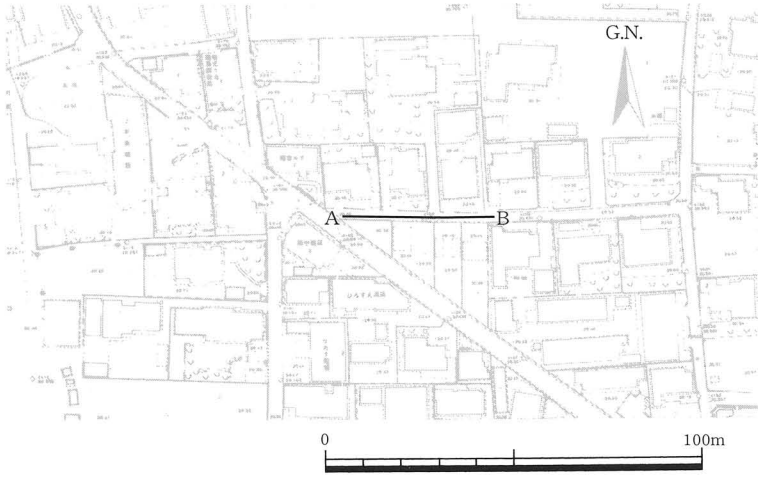
D-14・15地点：14・15地点は一番北側の路線の中央部で、標高は約20.4mである。路面からの検出面の深さは0.62mで、検出面はアカホヤ火山灰層である。

調査の結果、竪穴式住居跡３軒、溝状遺構１条、柱穴１個を確認できた。

竪穴式住居跡はいずれも重複しているが、切り合い関係を明確にすることはできなかった。また、１号住居跡は南辺と西辺、２号住居跡は西辺、３号住居跡は南辺の一部分しか確認できない状態であるため、規模等についても現状では把握することは不可能であった。検出面から床面の深さは0.09 m～ 0.24 mで、床面は平坦である。主柱は検出できなかった。溝状遺構は、幅は不明であるが、深さは 0.13 ～ 0.64 mで、18 地点まで延びており、その現存長 17.5 mを測る。

D-19 地点：市道 301 号線から入り込んだ袋小路で延長約 50m を測る。アカホヤ火山灰層が現地表面から約 80 ～ 100cm ほどの深さで残存しており、竪穴住居跡が２軒検出できた。１軒は住居内の脇に地床炉があり、土師器長胴甕を伴っており、良好な共伴資料となる。

出土遺物：遺物は土師器をはじめ須恵器・磁器等が出土している。１・２はいずれも土師器椀で、丁寧なヘラ磨きが施されていたと思われるが、摩滅が著しく一部分しか確認できない。１は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部に至っている。端部は丸い。復元口径 15.2 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。２も丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部に至っている。端部は丸い。また、底部外面には木の葉痕が残る。口径 12.2 ㎝、器高 4.2 ㎝を測る。時期的には７世紀前半頃のものと推定される。



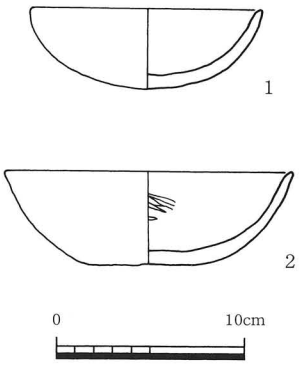


Fig22　D-14 ～ 17 地点位置図　（S = 1/2,000）

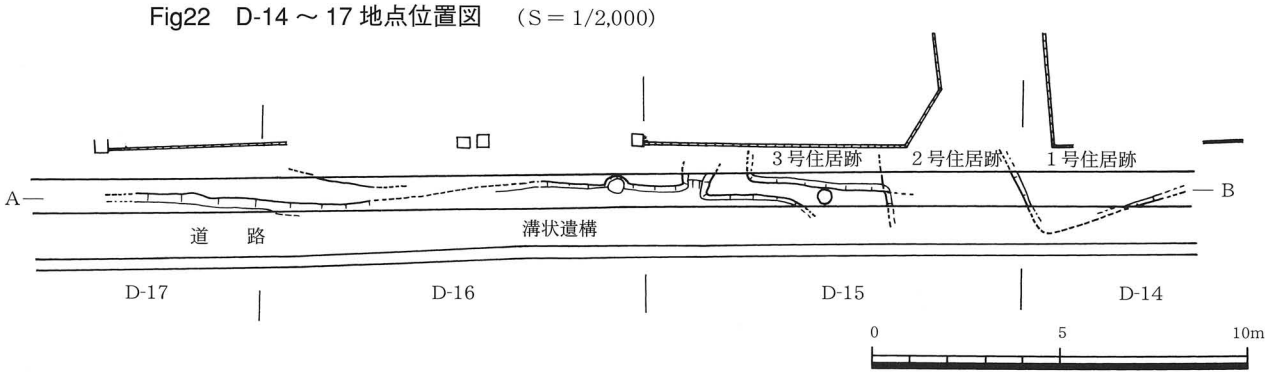


Fig23　D-14 ～ 17 遺構分布図及び住居跡内出土遺物実測図　（S = 1/200、1/4）

第Ⅳ章　小　結

本調査は下水道敷設工事に伴う調査であるため、狭長な調査区となり、各地点で遺構と考えられる堀方を検出してもその全体像を抑えることはできない。そのため調査の主眼を、広い範囲の遺構分布状況と種類を把握することに据え、各地点における遺構の性格や遺構に伴う遺物の時期、層の堆積状況等に注意しながら調査を進めた。

1、2、B区：童子丸遺跡に当たるこの調査区では、道路敷設や宅地造成時に地層が削平され、遺構自体が残る割合の少ない路線が多くあったが、現地表面から約80～100cmの深さに遺構面があり、遺存状況が非常に良い路線など各地点の遺跡の残存状況が明らかとなった。本報告で取り扱った、ほぼ遺構の性格、時期が特定できる成果まで得られた。

市道219号線の東側である1区立会区間や2-1～9地点は遺構の残存状況が悪く、西側に当たる1-6～9地点、2-11、12地点、B-1～5地点には竪穴住居跡と考えられる遺構と遺物が確認できた。さらに上層には近世の遺物包含層があることも確認できた。1-8地点からは6世紀後半に位置付けられる須恵器が出土し、近接するB-4地点の竪穴住居跡から出土した大型鉢や長胴甕破片、須恵器破片は6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる(Fig20)。また、B-4地点では土坑内に寛永通宝が出土し、B-12地点では、17世紀末～18世紀代の肥前系染付椀が出土したことから当該期の遺構が上層に広がっていることも確認できた。

C区：位置も日向国府跡の北側にあるため、併行する時期の遺構が確認できるか注意を払った。C-1～5地点は水道管が敷設されていたが、遺構検出面より上であったため撹乱は受けず、竪穴住居跡が検出できた。遺構に伴う出土遺物を押さえることができ、土師器と須恵器の共伴関係が検討できる資料がある。C-1地点では地床炉と埋甕が検出でき、その竪穴住居跡の埋土に伴い内面に暗文を施した土師器坏、須恵器椀の破片から7世紀後半の遺物群と考えられる。C-5地点では竪穴住居跡と考えられる堀方内から多くの遺物が出土した。須恵器、土師器坏や深鉢の特徴から7世紀前半の遺物群であろう。C－6～10地点、C－11～18地点といった調査区は柱穴や土坑などが確認され、それに伴い、土師器や須恵器、瓦などが出土した。特にC-18地点で確認できた遺構とそれに伴う遺物群は、土師器椀や瓦の特徴から、9世紀後半から10世紀初頭頃のものと推定した。C-1～5地点から1-8地点やB-4地点にかけて6世紀後半から7世紀代の集落があるものと考えられ、さらに西側にかけて広がるものと推定する。また、日向国府跡の北側に当たるC-6～18地点では9世紀代～10世紀前半期の遺構が広がると考えられる。

（文責　津曲）

3区：3区の調査では、南側調査区で旧河道、北側調査区で竪穴式住居跡及び消失円墳（葺石・周溝）等が確認されるなど大きな成果を得ることができた。

特に、消失円墳については、葺石が配された大きな円墳であったことが判明した。これまで、西都原古墳群第259号や5区の周辺で、稚児ケ池の北側一帯に所在する円墳のトレンチ調査を行ったが、関連した遺構・遺物は検出されなかったため、不明な点が多く、時期も特定できなかった。この消失円墳の検出は周辺古墳を解明する手掛かりになるかもしれない。

南側調査区から出土した遺物には、「寺崎遺跡」の報告書でⅢ期として分類されている範疇に含まれるものが出土している。時期的には日向国府の正殿と脇殿が建立された9世紀初めから前半に

比定されているが、それ以降のものも多数含まれており、日向国府が日向国の中枢機関として発展し、その周囲に古代都市が形成され、多くの人々が生活していたものと想定される。

4区：各地点から、多くの竪穴式住居跡が重複して、さらに、掘立柱建物跡の柱穴等が確認されたことは、周辺地域に集落が継続して存在していたことを示唆しており、それが、延々と現在まで至っていることが判明した。タイプ的には、カマドを有するものが割りと多く確認されているが、一部を除きカマドを使用していたのは共伴遺物から主に7世紀から9世紀にかけての時期と思われる。このタイプの竪穴式住居跡は、平成13年度区画整理事業に伴い実施した事前調査でも近くの地点で多数確認されており、かなり広い範囲に広がっているようではある。しかし、残念ながら狭い範囲の調査であり、竪穴式住居跡の切り合い関係や規模、カマドの全体的な形態や機能等を明確にすることはできなかった。また、時期の特定についても大まかで、細かな変遷を辿ることはできなかったが、本調査区を含めた周辺地域の全体像が少しずつではあるものの明らかになってきたことは大きな成果である。

D区：日向国府跡（日向国衙跡）の縁辺部にあたる地点も含まれており、期待されたが、残念ながら関連する遺構等は確認することはできなかった。しかし、周辺には布目瓦を含む多量の遺物が散布しており、日向国府及び関連施設の遺構の存在が想定できる。

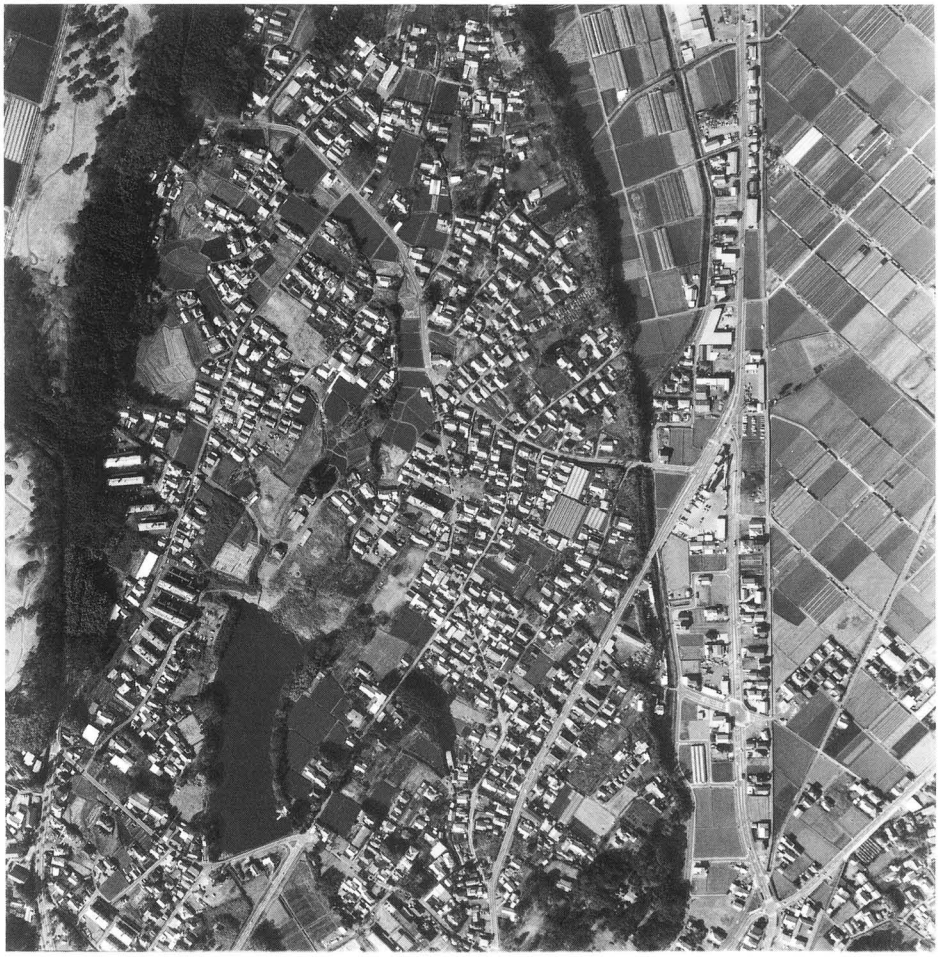
（文責　蓑方）

註

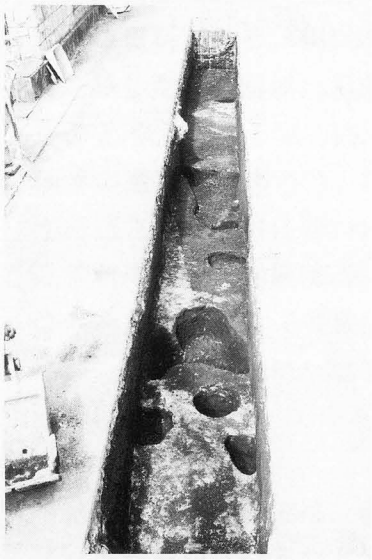
（1）筌瀬明宏　編「堂ヶ嶋第2遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集』2003

（2）蓑方政幾　編『遺跡所在確認調査（市内遺跡発掘調査）事業に伴う発掘調査報告書』1991

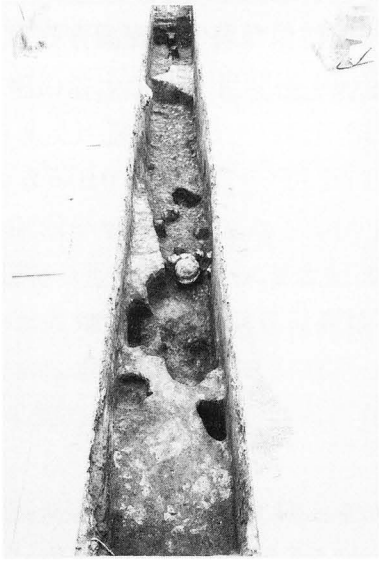
（3）宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」『国衙跡保存整備基礎調査報告書』2003



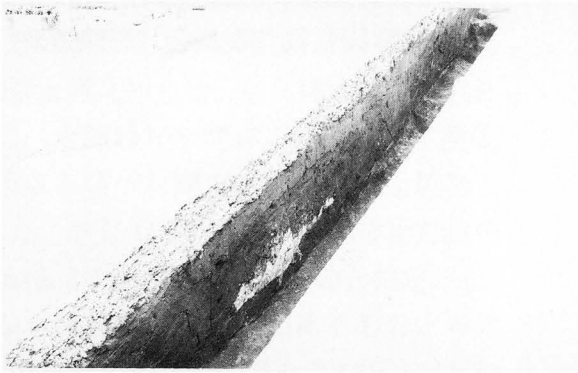
1．調査区全景（真上から）



2

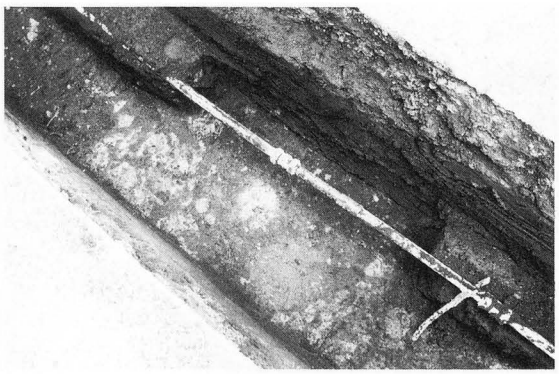


3

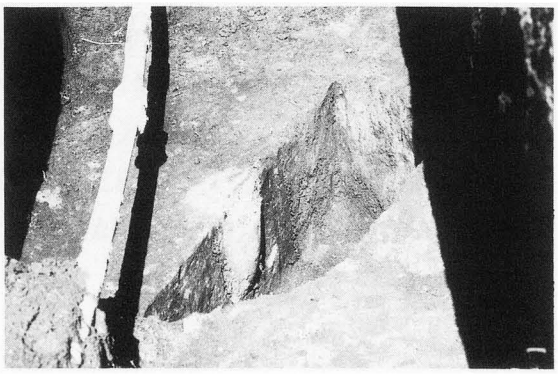


4

2．B-4 地点　近世面
3．B-4 地点　竪穴住居跡掘削状況
4．B-4 地点　土層
5．C-1 地点　柱穴堀方検出状況
6．C-1 地点　柱穴堀方半裁状況

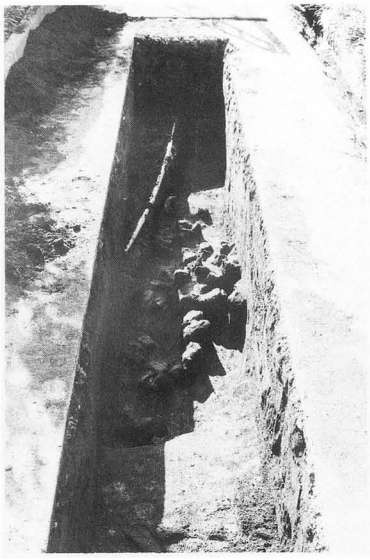


5

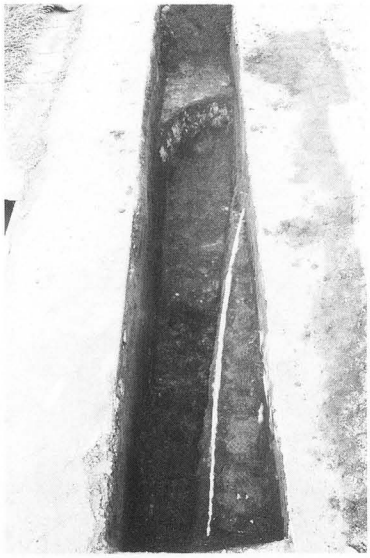


6

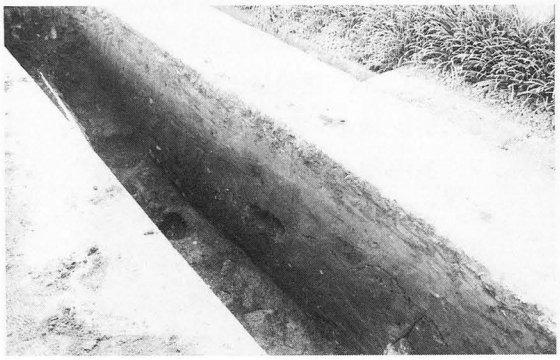
1



2



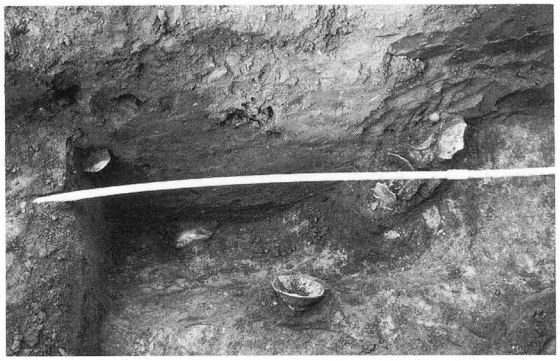
3



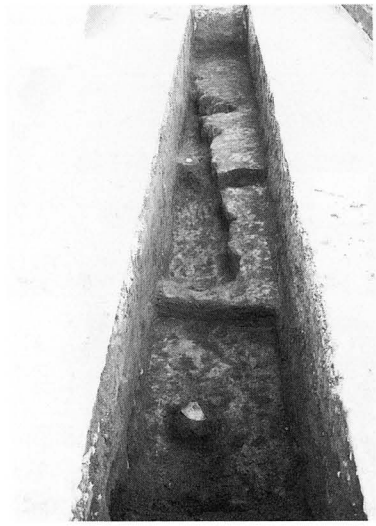
4

5

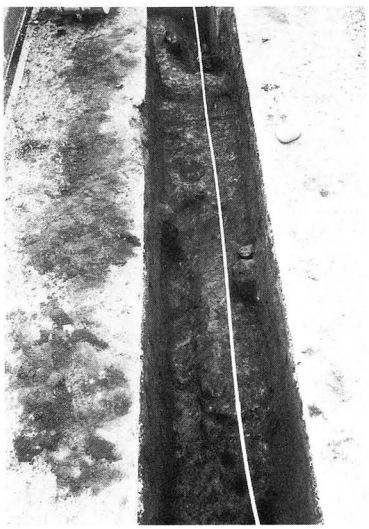
6



9

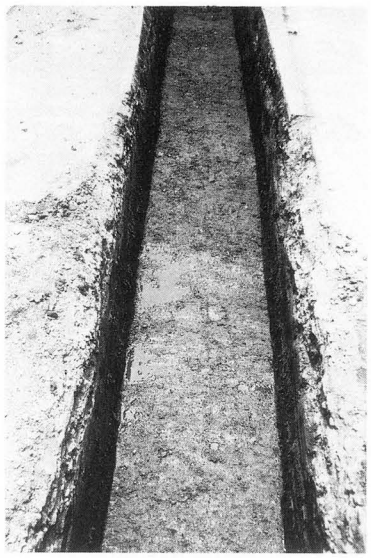


7



8

1．C-5 地点　遺構検出状況（南から）
2．C-5 地点　掘削状況
3．C-5 地点　竪穴住居跡掘削後
4．C-15 地点　土層
5．C-15 地点　竪穴住居跡掘削後
6．C-15 地点　カマド跡掘削後
7．C-17 地点　遺構掘削状況
8．C-18 地点　遺構掘削状況
9．C-18 地点　土師器椀出土状況

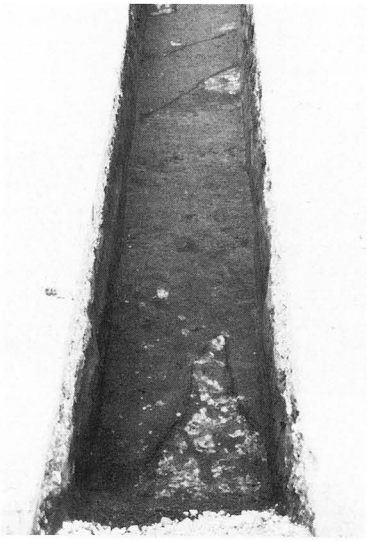


1

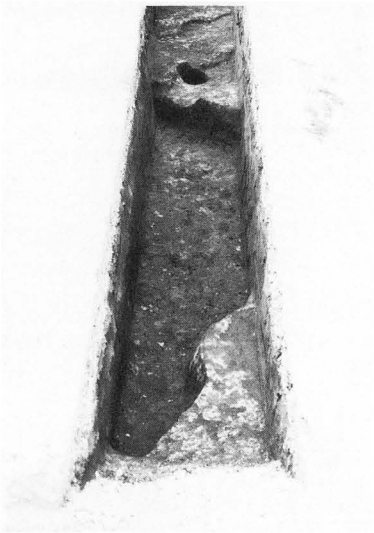
2

3

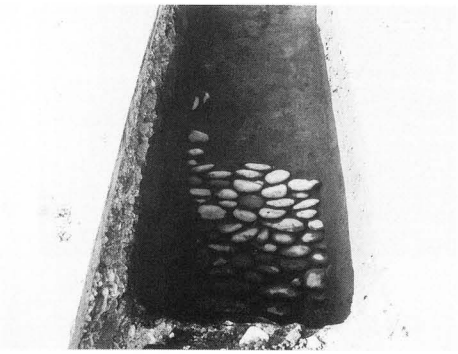
1．3-2 地点　掘削後状況
2．3-3 地点　土層
3．3-7 ～ 11 地点　掘削前状況
4．3-8 地点　遺構掘削前状況
5．3-8 地点　遺構検出状況
6．3-12 地点　古墳葺石検出状況①
7．3-12 地点　古墳葺石検出状況②
8．3-14 地点　古墳葺石検出状況①
9．3-14 地点　古墳葺石検出状況②
10．3-14 地点　遺構内土層



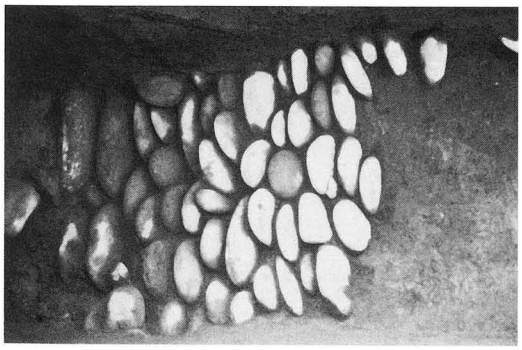
4



5

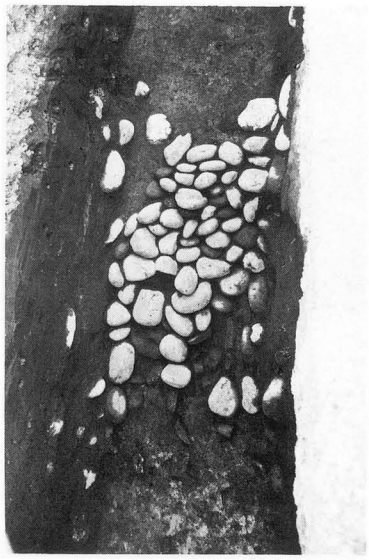


6

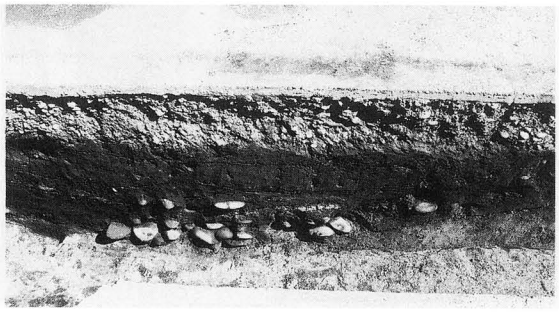


7

8



9



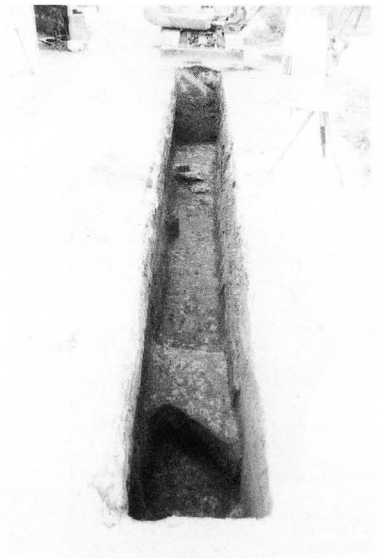
10

1

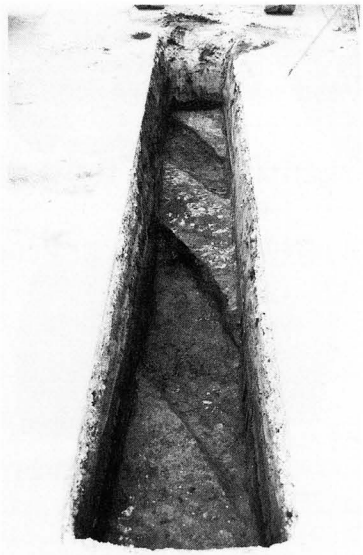
2

3

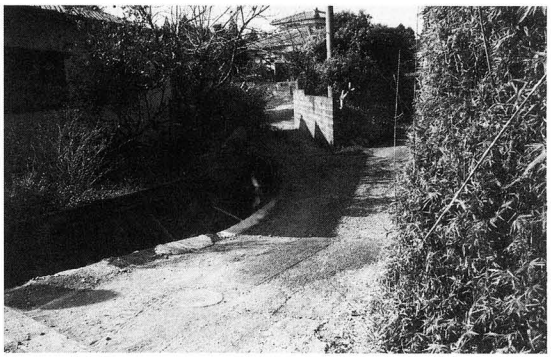
1．4-1 地点　掘削後状況
2．4-20 地点　遺構検出状況
3．4-20 地点　カマド検出状況
4．4-27 地点　遺構検出状況
5．4-30 地点　遺構検出状況



4

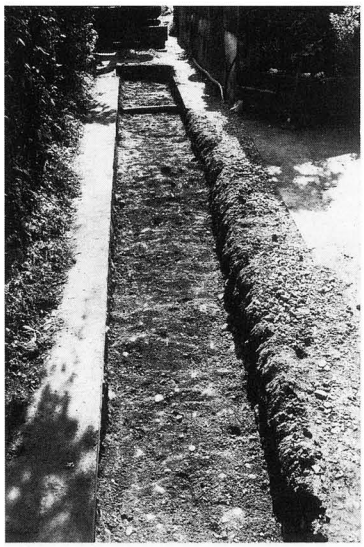


5



6

7



8

10

6．D-2 地点　掘削前状況
7．D-2 地点　掘削後状況
8．D-5 地点　掘削後状況
9．D-10 地点 遺構検出状況
10．D-15 地点　遺構検出状況

9

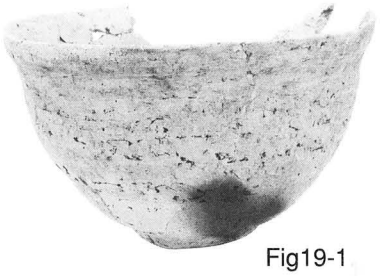


Fig19-1

Fig19-3

Fig21-9

Fig21-17

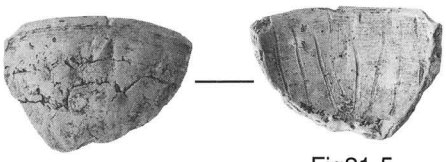


Fig21-5

Fig21-8

Fig21-12

Fig21-14

Fig21-23

Fig21-22

Fig21-20

Fig21-21

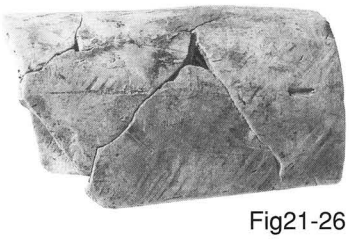


Fig21-26

Fig21-28

Fig21-24

Fig21-25

Fig6-1

Fig7-6

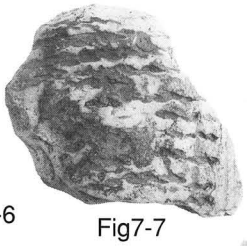


Fig7-7

Fig9-8

Fig9-9

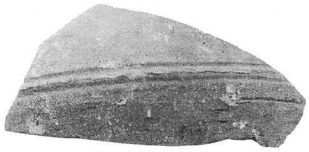


Fig6-3

Fig14-4

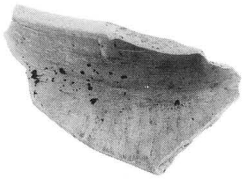


Fig14-8

Fig16-14

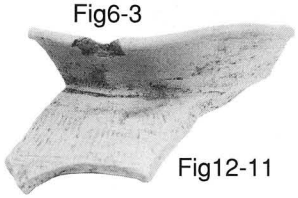


Fig12-11

Fig14-7

Fig14-6

Fig16-13

Fig12-13

Fig12-14

Fig14-9

Fig23-1

報告書抄録

ふりがな	どうがしま　てらさき　ほうが　どうじまる
書名	堂ヶ嶋遺跡、寺崎遺跡、法元遺跡、童子丸遺跡
副書名	妻北地区公共下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ
巻次	第1集
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第42集
編著者名	蓑方政幾、　津曲大祐
編集機関	西都市教育委員会
所在地	〒881-0033　宮崎県西都市聖陵町２丁目１番地　　ＴＥＬ　0983-43-1111
発行年月日	西暦　2005年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間
堂ヶ嶋遺跡 寺崎遺跡 法元遺跡 童子丸遺跡	宮崎県 西都市大字三宅、 右松、童子丸	1016 1017 1020 1021	X＝－97700 ～ X＝－98500	X＝38300 ～ X＝37700	20040617 ～ 20050202

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
妻北地区下水道敷設事業に伴う発掘調査	散布地、集落跡	古墳時代後期・奈良・平安	消失円墳周溝、竪穴住居跡、溝状遺構	土師器・石錘・須恵器・磁器	

調査面積	試掘調査	本発掘調査
		1783㎡

西都市埋蔵文化財発掘調査　第42集

堂ヶ嶋遺跡・寺崎遺跡

法元遺跡・童子丸遺跡

平成17年3月18日発行

編集発行　西都市教育委員会

印刷所　㈲ふくしげ印刷